

報 特 攻

平成2年8月

第11号

〒102 (新)
 東京都千代田区九段南
 4-3-7 勸修行社内
 特攻隊慰霊顕彰会
 特攻平和観音奉賛会
 電話 03 (263) 0851

編集人	田 中 賢 一	最 上 貞 雄
発行人	田 最	中 上 貞 雄

第12回

特攻隊合同慰霊祭

平成2年3月25日
 靖国神社で挙行

祭 文

謹んで特別攻撃隊殉国烈士の御霊に
 申し上げます。

御遺族、来賓、会員合せて五十四人が参集し厳粛に行はれた。
 今回は三年の歳月をかけて完成した「特別攻撃隊」なる書物を神前にお供えし、竹田会長の祭文をもってその旨を英霊に報告した。

慰霊祭が終わってから、御遺族を囲んで靖国会館で直会を実施したが、例年のことながら場所が狭く参加者全員が入りきれないのは、誠に残念なことである。会員の老齢化に伴い、別の場所に移動して改めて懇親会を行うことも一考を要し、今のところ名案も得られない。

国運を賭けての戦であった大東亜戦争に於て、英霊の皆様には当時弱冠十七、八歳から二十歳代の春秋に富むお歳であられながら、国難打開の為に最愛の肉親への恩愛を断ち切って、特別攻撃を決行されて身命を祖国に捧げ、一片の肉片すら残すことなく美事に散華されました。

その皆様の誠忠遺烈により当時の我が全軍将兵の闘魂烈々として燃え上り、日本は国を挙げて深く感泣致したのでありましたが、終戦となってから四十五年を経ました今日、日本は立派に復興を遂げ得ましたことは、之全く英霊皆様のご加護によることであり、私どもはその御恩に報ゆる為にも愈々精進して、祖国の繁栄と世界の平和に尽して参ります決意の程を、ここに

誓いたします。

英霊皆様の壮絶なる御心を末永く後世に伝えるために、三年の歳月をかけて特攻隊慰霊顕彰会の総力を結集して陸海軍に亘る全特攻隊の総覧とも申すべき「特別攻撃隊」と云う本を刊行致しました。

本日桜花爛漫たる靖国の社前にその本を奉呈し、御遺族の方々をはじめ関係者相集い、在天の英霊に深く心からの敬弔の誠を捧げます。

英霊におかれましては、今後とも何とぞ安らかにおわしますことを念じます。

平成二年三月二十五日

特攻隊慰霊顕彰会

会長 竹田 恒徳



遺族席

参会者に挨拶される
 竹田会長



震洋隊のメツカ 川棚で慰霊大祭

海軍震洋特別攻撃隊戦没者慰霊の「特攻殉国の碑」墓前祭は、5月13日長崎県川棚の同碑前で遺族、生存隊員、地元民ら約八百人が参列して盛大に挙行された。

この地は大戦末期、震洋艇、魚雷艇多数が海上訓練をした大村湾の奥深きところであり、ここで青春時代を過した参列隊員は終生忘れることのできないところである。

軍服姿の海軍軍装会による軍艦旗揚げ方とラッパ吹奏で開幕の大祭は、相田英雄・特攻殉国の碑保存会会長の「英霊よ、安らかに」（別項）をはじめとして、遺族、長崎県知事、川棚町長、海上自衛隊佐世保地方総監ら各界代表が次々と献辞、献花した。

頭上には海上自衛隊機三機が低空で慰霊飛行、その轟音の中に特攻隊慰霊顕彰会理事長鈴木暲五郎氏、震洋会会長田中和氏（東京）及び震洋隊各部隊員が亡き戦友へ敬けんな祈りを捧げた。

昭和19年5月から開始された震洋特別攻撃隊員募集は、ここ川棚の地から始まり、全国各海軍部隊、学校等で行われた。搭乗員は指揮官に兵学校、兵

科予備学生、特務士官、高等商船出身の士官が、また隊員（搭乗員）には予科練の甲飛・乙飛・特乙飛の下士官が選抜された（初期は一般兵科の下士官兵）。最年少の搭乗員は十六、七歳、童顔消えぬ面影ながら凜然として特攻隊訓練施設に入隊した。

思えばその初募集の際の指切り（血書）である。筆者の属した第一期魚雷艇学生（兵科三期予備学生）はある日のこと、主任指導官末次信義少佐（沖繩突入作戦の旗艦大和の水雷参謀で戦死、大佐）から整列を命ぜられ、特攻隊志願の是非を返答するように申し渡された。居住区（兵舎）に戻っての同期らの雰囲気は、圧倒的に志願である。そこで筆者は「志願します」程度では振り落とされる可能性があるとして、指を切って「最熱望」としたため就寝前に提出した。後で聞くと血書志願は大勢を占めたという。

ここ大村湾を展望しての指切りは今も鮮烈に脳裏に刻み込まれている。しかも、眼前にある「特攻殉国の碑」には、筆者の第十六震洋隊戦没隊員五十七柱の氏名が刻記されており、さながら特攻隊員時代そのままの境地である。海上自衛隊儀仗隊による吊銃の発射音に思わず、滂沱の涙を流した。

慰霊大祭には地元新郷谷の住民が多

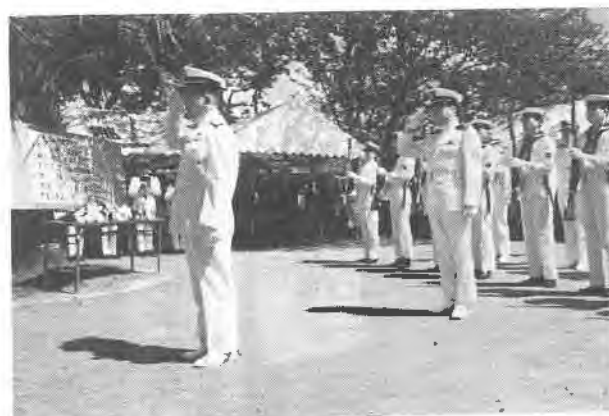
数で奉仕したほか、うら若き佐世保海軍少年団女子隊員が参列者への世話役をつとめた。有難いことであり、後姿に合掌した。（野崎慶三・元海軍大尉）



若鷺の歌を斉唱乙飛19期の予科練（碑前）



震洋会会長田中和氏(兵科5期予備学生・少尉)



海自佐世保地方総監と儀仗隊



碑前の震洋艇Ⅱ型模型

慰霊の辞

特攻殉国の碑保存会会長

相田英雄

特攻殉国の碑慰霊祭を執行するに当り謹んで霊前に慰霊の辞を捧げます。

先の大戦はミッドウェー海戦の失敗を転機として、昭和十九年に至っては敵の怒濤のような侵攻作戦を止むるに由なく、帝国海陸軍は遂に各種の特攻戦術を採用するに至りました。

このような戦勢に直面したとき、英霊の皆様には一死以って君国の危急を救うべく敢然として特攻隊に身を投ぜられたのでございます。国家の自由と独立を守り、国民の安全を守るといふ最も大切に尊い任務を持つ軍人として、身の危険を顧みず敵陣は立ち向うことは必しも至難の業（わざ）ではないといえましょう。

すなわち、危険な作業であっても運が良ければ生きて還れるという、いわゆる決死隊ならば過去にも幾多の戦例があつて、軍人の使命観に照らしても十分納得されると思ひます。

しかし、今次大戦の特攻隊のように万が一にも生還を期し難い戦術に身を投ずることは並々ならぬ心の葛藤があつたであろうと、私には十分頷れる

ところでございます。

私も第六震洋隊隊長として特攻隊でございました。私の記憶としては「貴君は特攻隊である。死んでくれ」ということを上級者から聞いたことはありません。震洋艇の説明では敵艦に五〇メートルまで接近したら敵艦に向けて舵を固定して、海の中に飛び込むのだ、という表向きの話は聞いたように思ひます。（事実、その装置もついております）。

乗つたままで敵艦に衝突するという教育は恐らく英霊の皆様も受けておられないと思ひます。建前は敵前で海中に飛び込んで逃げることになっていましたが、誰ひとりとしてそんなことを真に受けて聴いた人はいなかつたと思ひます。

むしろ、敵前五〇メートルまで接近することができたら、これは大成功であつて、この大成功を更に戦果に結びつけるためには、そのまま舵を握つて敵艦に衝突することこそ本望であつて、海中に逃げようなどと考えられた方はなかつたと思ひます。

果して幸運にて敵艦五〇メートルまで近づいて舵を固定して飛び込んで長さ僅か五メートルの特攻艇はたちまち浪に頭を振られて真っ直ぐには走らないことをよく知っている搭乗員とし

ては、そんなことができるわけがありません。

従つて、震洋艇搭乗員は誰からも教わらない特攻攻撃を自らの心中固く決心されていたものと信じます。何と悲しいことではありませんか。しかし、それよりも更に悲しいことは、実戦ではそこまで接近できた艇が果して何隻あつたでしょうか。幸いにあらゆる苦難を乗り越えて大戦果を収められた艇があつたとしても、そのお手柄と、その勇士の名前を確認する手立てさえなかつたと思われまます。英霊に対し、これほど申しわけないことがありませんうか。

これほど悲惨な状況の中にも敢然として身を捨てて我が国を守ろうと散華された諸英霊であればこそ、私たちは唯々深く深く頭（こうべ）を垂れて、その滅私報国の至情に対して、限りない感謝の誠心を捧げるものでございませう。

尊い生命を御国のために捧げられた戦没者の英霊を鄭重にお祭りして崇め尊ぶことは、国家として国民として至極当然のことであつて、世界の国々でこれを行わない国はありません。しかるに、我が国の現状は戦後四十余年を経ても、なお戦勝国の日本弱体化政策に毒されて、さらに最近に至つては首

相の靖國神社参拝もないなど、言語道断英霊の遺志を冒瀆すること甚しい事柄かと存じます。

このことは外からの不当な圧力に屈したもので、国家百年の大計を誤まるものであります。ご遺族はもちろんのこと、心ある国民の絶対に納得できない事柄であります。

この碑を建立以来、多くの歳月が経ちましたが、祭祀はますます盛んとなり、霊前に集うご遺族をはじめ戦友一同、参列者各位は、ひとしく英霊のご偉業を偲び感謝の誠を捧げること、いよいよ切なるものがあります。

この場に集う人たちの背後には国の将来を思う国民幾千万の心が見詰めていると信じます。

英霊よ、どうぞお享け下さい。そして我が国の行末をお守り下さい。

（第6震洋隊長・ボルネオ・海軍兵学校66期・少佐）



平成二年度

義烈空挺隊慰霊祭

沖繩本島摩文仁台上慰霊碑の前で
五月二十七日行はれた



本慰霊祭実施の由来

昭和51年に全日本空挺同志会によって、沖繩本島南端の摩文仁の台上に、この碑が建立された。

義烈空挺隊が沖繩北、中両飛行場に突入したのは、20年5月24日である。例年5月24日に最も近い日曜日に、全日本空挺同志会沖繩支部が主催して、慰霊祭を実施している。

全日本空挺同志会のことは、別項で説明する通りであるが、全国の支部のうち沖繩支部だけは、旧軍の老兵は一人もなく（嘗て三人いたが全員物故）習志野の自衛隊空挺部隊から沖繩に転属になった数十名の現職自衛官で構成されている。現支部長は先任者の田淵精一二佐（陸上自衛隊第一混成団所屬）である。従ってこの慰霊祭は我々老兵共が全員いなくなっても、自衛隊が存続する限り絶えることはない。

当日の慰霊祭

参加者は空挺同志会沖繩支部員20名と県外からの参加者は約50名（空挺同志会会長及理事長、習志野から空挺団長以下6名、義烈空挺隊の母隊である挺進第一聯隊第四中隊関係者9名等）。例年義烈の遺族が数組参列されるが、本年はなかった。なお来賓として沖繩自衛隊地方連絡部長、第一混成団副団長、翼友会（沖繩在住陸海軍航空関係者の会）代表など約一〇〇名が参列し神式により執行された。

当日祭文や追悼文を奏上した者は次の通り

- 沖繩支部長（主催者） 田淵精一
- 空挺同志会理事長 田中賢一
- 自衛隊第十空挺団長 木家 勝

追悼辞

祖国の山野に花散り花咲きて四十五年
平和なる社会に在りて 我等忘れんと
して忘る能はざるは 共に戦いて国に
殉せし戦友のことども 脳裏を離れざ
るは特攻戦没の烈士なり 此碑前に
佇みて義烈の文字を凝視せば 奥山隊
長以下の魂魄瑟瑟として我等が胸臆に
迫り来る

国家興亡の岐るるの秋 狂瀾を既倒
に廻らさんと 兄等決然立ちて敵中に

挺身せらる 然れども大廈の顛らんと
するや一木の支うる所に非らずとか

悲願空しく戦敗れ 兄等と幽明処を異
にす 我等爾来兄等の遺志を継ぎ粉骨
碎身 祖国に繁栄を齎したれど 我等
が働き命捧げし兄等の勲に比すべきも
非らず

戦後教学の陵夷甚しく 価値観の転倒
するものあるも 兄等と共に抱きし信
条に我等微動だにすることなく 兄等
が遺徳顕彰に余生を捧げんとす 而し
て護国の大精神はここに連なる若き防
人に継承せられあり

摩文仁の丘に登り聊か所懐を述べれば
数万の英魂ここに漂うを覚ゆ
みそなわせあれ 今日祖国を
加護し給え 後継ぐ防人を

義烈の御霊鎮まるは沖繩の山野か
将たまた果しなき大空か

我等も亦何れの日にか幽界に赴き兄等
と一觴を交さん しばし待たるべし
平成二年五月二十七日

全日本空挺同志会理事長

田中賢一





自衛隊音楽隊



追悼の辞を奏上する自衛隊・空挺団長



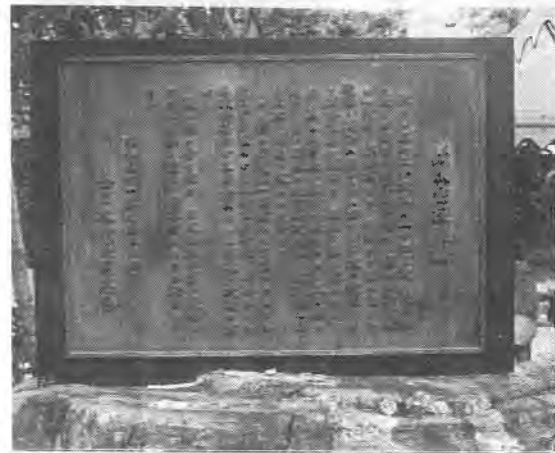
読谷の碑



摩文仁における慰霊祭に先立ち、県外からの参加者は読谷（よみたん）飛行場跡に行き、英魂を弔った。北飛行場跡は現在も国有地で米軍が演習に使っているが、所謂黙認の耕地となっている。
当初ここに慰霊碑を立てる案もあったが、交通不便なので摩文仁にした。

秋ソレ昭和二十年五月二十四日夜敗色既ニ濃キ沖繩戦場読谷飛行場ニ突如強行者陸セシ数機の爆撃機アリ 該機ヨリ躍り出タル決死ノ将兵ハ飛行場ニ在リシ多数の敵機及ビ燃料弾薬ヲ爆碎シ混乱ノ巷ト化セシメタリ 為ニ飛行場ノ機能喪失スルコト三日間ニ及ビンノ間我ガ航空特攻機ハ敵艦ニ対シ至大ノ戦果ヲ収ムルヲ得タリ
コレ我ガ挺進第一聯隊ヨリ選出セラレタル義烈空挺隊及ビ第三独立飛行隊ノ壮挙ニシテ両隊將兵百十三名全員ココニ慇久ノ大義ニ殉ゼリ
後ニ続ク者ヲ信ジ日本民族守護ノ礎石トナリシ將兵ノ靈ニ我等何ヲモツテ応エントスルヤ
昭和五十一年五月二十四日
全日本空挺同志会

義烈空挺部隊讃



副碑一



その文字を書いている 奥山隊長

奥山隊長の筆蹟を銅版にしたもの



副碑二 挺進殉国

「特別攻撃隊」出版記念会

三年の歳月と特攻隊慰霊顕彰会の総力を結集して、特別攻撃隊の全貌を伝える「特別攻撃隊」が漸く完成した。そこで去る6月21日東京原宿の水交会にて出版記念会が開催された。

竹田会長を始めとして一〇〇名からの方々が馳せ参じて下され、竹田会長の挨拶の後、編集委員を代表して生田惇氏の別紙の様な編集にまつわる挨拶があった。

この度「特別攻撃隊」出版に対する御礼として多額のご寄附を下された。ジュピター・コーポレーション(株)会長藤村義朗氏に対し竹田会長より感謝状が贈呈され、藤村氏より「特攻隊に対する感謝報恩の実践について」と題するスピーチがあり、日本武尊と特攻の御心や英国における空中特攻隊等の話があり、特攻の様な純真な「愛他精神」は、キリストの愛、釈迦の慈悲などに直結する神の心であると説かれ一同感銘深く拝聴した。

続いて竹田会長より生田、田中両氏を始め編集委員に対し感謝の寸志が贈られた。

俳優の川谷拓三氏も来場され今秋松竹系で公開される特攻隊に関

する映画「北緯15度のデュオ」の話があった。

世田谷観音寺の住職太田賢照師により英霊に献杯の儀が行われ、副会長寺崎隆治氏の発声で乾杯、和やかな祝宴に入り、盛大裏に祝賀会を終った。

その間フジテレビの松尾紀子さんが取材に来られ、祝賀会の模様はその日の夜の「スーパータイム」で早速放映された。放映が終ると間もなく全国各地より「先程テレビで見た特攻の本はどうすれば入手出来るか」との問合せの電話が殺到し、今更ながらマス・メディアの力には驚かされた。



挨拶される竹田会長

生田 惇

私が第一と第二部の編集に当たりました生田でございます。ひとことこの本の編集の趣旨などについて御説明致したいと存じます。まず、陸・海軍特別攻撃隊の全部を網羅して、その編成・作戦行動及び特攻戦没者、そしてその慰霊顕彰の概要を明らかにする事に努めたことであります。これは、わが国の最初の試みでありまして、軍事史上大変有意義なことであったと信じられます。このために、慰霊顕彰会の各委員に大変な御協力を頂きまして、心から感謝致しております。ただ、残念なことに、このような広汎な事柄を扱いましたために、個々の特攻隊員の心情や、感動的な言動を記載する余裕がなくなりましたこととあります。この点、特に御遺族の方々に御不満も多かろうかと存じます。しかし、次の二点につきましては、十分に心して編集致しましたので、この点をお汲み取り頂けたら幸でございます。即ち、特別攻撃隊の作戦的な意義と歴史的な意義であります。

特攻作戦は、わが国の危急に際して取られた、本当に身を切られ

る切羽詰まった作戦であります。

そこでは若者達が全身全霊をこめてこの作戦を成功させるための努力を致しました。その成果が大東亜戦争における赫々たる特攻戦果であります。エレクトロニクスの発達した今日において、もはや体当たりの必要はなくなりましたと思われませんが、その一身をかえりみない愛国心と、兵器の開発、訓練に示された血の滲むような努力は、現に今日の日本の独立と平和を護って来たものでありますし、将来の日本の防衛についても重大な示唆を与えているものと信じられます。この点につきましては、御来席の防衛庁関係の皆様にも十分な御研究をお願いしたいと存じます。

敗戦後の東京裁判以降、日本の歴史は悪しざまに書き換えられました。しかし、皆さん。ここに載せられた六千人に及ぶ特攻戦没者が、身を捨てて愛した日本が、悪い国であったと信じられますか。世界に遅れて開国した日本が、激動する世界の歴史の中で必死に生きて来た結果が大東亜戦争でありました。その間、国家の指導に誤りもあったと思いますが、国民は

正義を愛し、日本を信じて懸命の努力を続けて来たのであります。その歴史に恥ずべき点はないと思ひます。その証拠に、日本は隆々として繁栄しているではありませんか。ただ、日本が国際的に重視されないのは、国民が自分の利益のみを追求して、自ら国を衛る

の利益のみを追求して、自ら国を衛る気概を失はなつたからだと思います。今こそ特攻隊員の精神を学ぶべき時だと思ひます。この本の中でも申し述べ

ましたように、戦没特攻隊員の献身によって、ポツダム宣言第11条には「：日本が世界ノ貿易關係ニ究局ニ於テ参加ヲ許サレヤウ」との緩和条項が入

れられたように思われるのであります。国際的に孤立して戦争をやむなくされた日本であります。特攻隊員たちが命にかけて得たこの国際關係をこなうことのないよう我々としても努力すべきであると信じます。例えば米

の自由化とか大店法の問題など国際化についての諸問題がございますが、これなど特攻隊員の何万分の1かの勇氣と犠牲的精神があればたちどころに解決する問題ではなかるうかと思つてあります。

さて、このような貴重な本でございますが、私の不注意から所々に誤植がございます。誠に申訳なく、深くお詫申しあげます。また、資料の不足から

誤っている点もあろうかと思ひます。皆様の御叱正をお待ち致しておられます。長時間の御静聴有り難うございました。

「特別攻撃隊」の再版について

本書は出版以来大変ご好評をいただき、お蔭様にて、7月中旬で初版は売切れとなりました。

初版には申訳ありませんでしたが、若干の誤りがありました。それ等を訂正し、目下再版にとりかかっております。10月上旬には出来上がる予定です。多数の方々からご注文を頂いておりますが、出来上り次第に発送させていただきますので、何卒ご了承下さい。

今後とも引き続き本書の頒布にご協力を賜わり、国民の皆様に一冊でも多くお読み頂きますよう、切にお願い申し上げます。

価格三八〇〇円 郵送料五〇〇円
振替口座 東京四一五九五八〇
加入者名 特攻隊慰靈顕彰会

「特別攻撃隊」刊行を祝す

副会長 寺崎 隆治

昭和55年特攻隊慰靈顕彰会が陸海軍と確信いたします。

一体で発足以来、十年、毎年3月下旬の日曜日、靖國神社で慰靈祭、9月23日秋分の日世田谷平和観音で法要を実施して参りました。特攻隊慰靈顕彰会発足時全会員の願望は、靖國神社に特攻隊員像、特攻隊之頌、戦没特攻隊員の名簿を奉納しその精神を後世に伝えることでありました。

かくて全役員。会員。陸海空自衛隊員、全国有志の努力により六千万円の募金の達成、昭和61年7月靖國神社の遊就館開館時に特攻コーナーが設けられ、彫刻の大家田畑一作氏の「特攻隊員の像」「特攻隊出撃のレリーフ」四枚、中田祝夫文学博士監修の「特別攻撃隊之頌」、及び戦没者の遺品が陳列され、更に竹田恒徳会長をはじめ、三〇名の編集委員、理事、及び藤村義朗顧問の熱誠溢るる奉仕により、平成2年3月25日「特別攻撃隊」史(第一部作戦戦闘、第二部戦没者約五千五百柱名簿、第三部日本全国各地併せて一四三の慰靈碑、施設写真解説)を出版することができました。今次大

戦におけるわが特別攻撃隊の世界無比なる至純、至高の殉国精神を、後世に伝える歴史的事業である。特別攻撃隊の壮烈無双の行動、成果については終戦直後マッカーサー司令官参謀長サザランド中将の証言、昭和57年豪州の戦史家デニス・ウォーナー夫妻、妹尾作太男共著の「神風」や、平成元年9月23日世田谷平和観音法要の際、参列されたトルコ大使館附武官ジェンギス・アルボス海軍大佐の祝辞(特攻隊の行動は最高最大の愛国心の発露で崇敬の極みである)により明瞭であります。今日わが国の繁栄、平和享受の根源は、特攻精神にあると確信いたします。私達は遊就館に特攻コーナーが設置され、またこのたび貴重な歴史文献「特別攻撃隊」史が出版されたこの際、わが国民特に次代を担う学生、青少年が遊就館の特攻コーナーを見学し、また「特別攻撃隊」史を購読し、特攻精神の真髓を体得し、これを後世に伝え、祖国日本の安泰幸福と、世界平和繁栄に貢献することを祈念してやみません。

第36回知覧特攻基地戦没者慰霊祭

事務局長 最上 貞雄

今年も5月3日鹿児島県知覧にて戦没特攻隊員の慰霊祭が執り行われた。生憎の雨天にも拘らず、全国よりご遺族始め戦友並びに関係者、一千名に及ぶ多数の方々が参列され、厳粛の中に盛大に挙行された。



塗木町長の祭文に始まり、特攻隊慰霊顕彰会々々長竹田恒徳様の追悼の詞が代読され続いて陸士57期、特操会、少飛会等関係諸団体の代表者より往時を偲び切々たる追悼の辞が捧げられた。今年は「特攻」9号に記述された「特攻隊員別れのピアノ演奏」の記事で紹介された上野歌子さんも山口九州特操会より招待され、霊前に於いて感情豊に当時の模様を訴えられ、参列者一同に深い感銘を与えた。今年も特攻おばさんといわれた鳥浜とめさんが脚の悪いのをおして車椅子で参拝され多数の方々が久闊を謝した。

右の絵は鳥栖小学校にピアノと共に置いてあるもの、知覧に献上する絵は深川先生が更に大きなものを画かれる由。



上野歌子さんのスピーチと当時の楽譜



この話は既に「特攻」9号で紹介したところであるが、感銘深い話であるので、「特操二期生会報」第七号に出ている記事を転載する。

特攻隊員別れのピアノ曲

目達原基地から特攻隊員二人が鳥栖小学校を訪れ、「出撃前に思いきりピアノを弾きたい」と申し出たのは、昭和二十年五月のことであった。

上野音楽学校出身の二人は、ピアノソナタ「月光」ほか数曲を約一時間演奏する。二人を講堂に案内、深い感動で曲を聞いたのは教師の上野歌子さんである。それは明日の死を目前にした彼らの最後の生命の燃焼のように美しく悲しかった」と上野さんは「遠い夏の日」(鳥栖市芸誌の一章)に記されている。別れの時、二人は集まった児童約二百人と共に「海行かば」を合唱した。

本年五月三日、知覧での特攻戦没者慰霊祭にあたり、上野さんは、参列者の前で「心当りの方がおられたらぜひ教えてほしい」と訴えた。

この秘話を発表されたのは、このグラウンドピアノが廃棄されそうになったためであるが、鳥栖教育委員会に諮り「平和シンボル」として保存されることになった。そして鳥栖市長はじめ関係者は特攻隊員のために鎮魂歌「月光のバラード」をつくり、元佐賀大学の深川善次郎教授は、ピアノを弾く姿を三十号の油絵に描いている。この記録は西日本新聞などで報じられた。

特操二期生で目達原・第十一錬成飛行隊出身者(特攻隊員で当時在隊)及び関係者は、二人の隊員について調査中であるが、まだ確認を得ていない。

私共の団体

「特攻隊慰霊顕彰会」は、特攻隊に縁の深かった人々で構成している諸々の団体から代表者が出て、理事となっています。この度「特別攻撃隊」なる書物を編集するにあたり、その人達が記事を持ち寄って編集しましたが、この機会に各理事の母体となっている団体の現状を紹介し、今後の会の運営の資に致したいと思ひます。

ここに順序不同ですが、逐次に掲載致します。

回天会

会のできるまで

「回天」は日本海軍が誇る93式魚雷を、人が操縦できるように改造した一人乗りの人間魚雷で、次のような性能を持っていた。

全長 14・75米 直径 1米
 重量 8・3ト 炸薬 1・55ト
 速力 30ノット
 航続距離 12ノット 78・000米
 20ノット 43・000米
 30ノット 23・000米

昭和19年11月20日未明西太平洋ウルシー環礁に大爆発音が轟いた。「回天」の攻撃である。この日から終戦まで西太平洋の泊地や洋上で敵艦船を攻撃し米軍を恐怖に陥れたのである。

この「回天」

の偉業を顕彰し後世に伝える目的で、関係者、有志により昭和37年「回天顕彰会」が発足し回天記念館建設の募金を開始することになった。

同時にこの募金を支援し更に回天関係の諸事業を推進するため、搭乗員の会「回天会」が結成された。

回天記念館は、昭和43年11月回天発祥の地である山口県徳山市大津島に竣工開館した。

会の組織

回天会は会員数約千三百名で東京に本部がある。会の内部組織として東海回天会、関西回天会、九州回天会、四国回天会、長野県回天会、山形県回天会、大神回天会、土空回天会がある。

今までの行事

「回天」は終戦時米軍の指示により各基地において海中投棄等により処分され、国内には一基も存在しなかった。

回天会として「回天」を発見回収するため幾多の努力がなされた。

昭和40年の八丈島基地跡探査をはじめ各訓練基地、各展開基地を調査した。又海上自衛隊の掃海隊に依頼したり、民間の潜水艇も使用したが、発見できなかった。「回天」は朝鮮動乱時の特需景気の際ごとく引揚げ回収され、解体消滅したものと思われる。

昭和53年2月、ハワイの米国陸軍博物館々長セスラー氏より、靖國神社に對し「戦争開始時パナマに潜入した回天を所有しているが、神社で受け入れ可能かどうか」との問い合せがあった。

靖國神社から回天会に連絡があり、会としては「パナマ潜入云々」に疑問を持ったが、丁度ハワイ在住の会員がいたので、調査を依頼し本物であることを確認した。そしてただちに帰還、奉納の募金を開始し、昭和54年7月ハワイより横浜に到着、補修整備の上同年11日靖國神社遊就館前に安置奉納した。

しかし安置場所が露天であるので、日射、降雨、鳩害等「回天」の保存整備上問題が多かったので、再び募金運動を起し、昭和62年4月遊就館の再開と同時に同館一階ホールに移動した。

昭和63年1月回天搭載の伊号36潜水

艦の模型を靖國神社遊就館に奉納した。

主な行事

二年毎に回天会全国大会を各地持ち廻りで開催している。

ほかの団体が主催する回天関係慰霊祭は次のとおりである

毎年11月20日 山口県徳山市大津島で追悼式(回天顕彰会)

毎年8月15日 山形県月山々頂で慰霊祭(三山大愛教会)

毎年春 長野県佐久市で慰霊祭(長野県回天会)

毎年9月 岐阜県下呂町で慰霊祭(楠公社)

毎年8月13日 山口県光市で慰霊祭(光市連合婦人会)



回天記念館
(山口県徳山市大津島)

特攻殉国の碑保存会

人間兵器・震洋特別攻撃隊戦没者二千五百六柱を合祀の特攻殉国の碑は昭和42年5月17日、長崎県東彼杵郡川棚町新谷郷の地に建立された。

昭和19年4月建設され多くの魚雷艇乗りを教育訓練の「海軍臨時魚雷艇訓練所」は、この碑の直前に位置していた。最初に入隊の第一期魚雷艇学生は状況はその同期の芸術院賞作家の島尾敏雄著「魚雷艇学生」(新潮社)に詳しいがこのクラスが、回天・震洋・特潜・魚雷艇へと三々五々配置されたあと、震洋隊搭乗員の大量訓練の場となり、敗戦まで継続された。震洋隊の部隊数は一三三部隊となっているが、その大半はすべての臨時魚雷艇訓練所(後に川棚突撃隊に改編)で教育訓練を受けており、震洋隊のメッカと称すべき地である。

昭和41年8月の益田善雄氏(第一〇三震洋隊長)による、慰霊碑建立提案を受けて同年9月建立委員会が発足、全国募金をスタートさせた結果、翌4月までに目標額を達成した。

建立敷地二九八坪は川棚町をはじめとする地元民の熱烈支援協力の賜ものである。団地買収に寝食を忘れて奔走

の特攻殉国の碑保存会現事務局長西村金造氏(第六八震洋隊艇隊長)や当時、海上自衛隊佐世保警備隊司令であった相田英雄現会長、それと地元総代宮崎鎮人氏らの功績は極めて多大である。

碑石は長崎県特産の銘石蛇紋石を選び、さらに震洋特攻攻撃を行った、フィリッピンのコレヒドール島及び沖縄の石を、水谷秀澄氏(佐世保地方総監、川棚臨時魚雷艇訓練所教官)と安里芳雄氏(第六三震洋隊長)から送付を受け、碑の上部にちりばめて彩りを添え、建立の意義と重味を増すことにした。戦死者刻名の上にちりばめた、この戦跡地の石は、あたかも戦死者の英霊が「万歳」を叫んでいる姿を象徴するようである。

碑の維持保存をつとめる「特攻殉国の碑保存会」は初代会長原為一氏(海兵49期・川棚臨時魚雷艇訓練所所長兼川棚突撃隊司令)、二代会長福岡義雄氏(海兵62期・川棚突撃隊教務副官)を経て現相田会長(海兵66期)になった。会の事業内容は①会員募集②保存に関するもの③慰霊祭(毎年五月十五日に近い日曜日)④会報・名簿発行⑤その他関係事業など。事務局は長崎県西彼杵郡西彼杵町亀浦(〒851-33)西村真珠内。会費年額一千元、終身二万円。

全日本空挺同志会

創設の経緯

我が会は空挺特攻だけに関係する会ではない。また旧軍関係者だけの戦友会でもない。

陸軍の空挺部隊は一万有余を戦場で失い、終戦時の生存者は約二千名だった。戦後の混乱も概ね収まった昭和31年に、空挺戦友会なる団体が結成された。この会の本拠は大阪にあって、高野山建墓と部隊史編纂という二大事業を行った。

一方、昭和30年に陸上自衛隊の空挺部隊が習志野に創設された。編制装備訓練等は範を米軍にとったが、精神的基盤は旧軍空挺部隊に求むべきであるとし、自衛隊側の主催によって、新旧一体となった「全日本空挺同志会」の発足をみた。

会の構成

空挺戦友会はその後解散した。旧空挺部隊の生存者、自衛隊空挺部隊在職者及び他に転出した現職自衛官、自衛隊空挺部隊の退職者、の三本柱によって構成されている。会員数四、五〇〇人で、そのうち旧軍関係者は現在約六〇〇名いるが年々減少し、自衛隊空挺退職者の会員が主体となりつつある。

会長は自衛隊空挺団長だった者が交代で就任する習となっており、現在は第五代空挺団長だつて倉重翼である。事務局は千葉県習志野の自衛隊空挺団内にある。

全国に三五の支部があり、大半の会員は支部に所属している。

主な行事

・毎年4月に習志野で総会を行う
・毎年9月に高野山で慰霊祭を行う。

高野山には空挺戦友会の時代に作った墓があり、全戦死者の名簿が納められているが、その後死去した会員で遺族が希望する者は分骨を納めている。

・毎年5月に沖縄支部主催で義烈空挺隊の慰霊祭を行っている
・毎年11月23日に宮崎県児湯郡川南町にある護国神社の祭例に参加している。

空挺部隊の基地であった当時の川南村には挺進神社があつて、空挺部隊の全戦死者を祀つてあつたが、21年に米軍によって焼払はれてしまった。そこで24年川南護国神社が再建されたとき、ここに合祀したという由来がある。

毎月「落下傘」と称する機関誌を発行し、全会員に配布している。



① 顕彰の若潮会について

皆本 義博

一、若潮会発足の経緯

沖縄作戦に参戦した海上挺進第二十七戦隊の群長（小隊長）であった古賀一成（旧名清隆）が、海上挺進戦隊発祥の地であり又訓練基地であった江田島の隣の呉市で、コカコーラボトラーズの所長をしていた関係から、戦没者慰霊顕彰を思い立ち、かつて第十教育隊が所在した江田島町幸ノ浦の景勝の地に、町および地区の方々の同意を得て慰霊碑建立の運動を開始した。時あたかも、彼が沖縄戦で死闘を続けていた時から、十六年目にあたる昭和36年6月のことであった。

昭和38年になり、古賀清隆は、もと第十教育隊長斎藤義雄を中心とし、吉田浩次、皆本義博等と相はかり運動を進め、佐伯文郎元船舶司令官とも連絡をとり、顕彰碑建設目標を昭和42年4月1日と定めた。

こえて41年11月1日、江田島町総務課内に、陸軍海上挺進戦隊顕彰碑建設委員会を設立し、募金を開始した。

（募金目標八十万円）当時の役員氏名
 会長 松山作一 委員長 斎藤義雄

副委員長 岡村武男、金子昌功、菅原久一、富田稔、顧問 青井義治
 荒尾興功、内山恵太、坂清、佐伯文郎、中岡重成、永野巖雄、中浜吾祐、西浦節三、馬場英夫、檜山袖四郎、馬淵新治、三吉義隆、渡辺隆
 専任幹事（地元） 貝原淳太、鯨井清治、古賀清隆、和田功、（東京）儀同保、藤堂高豊、中島巖、皆本義博、吉田浩次、永井量雄、浅田種夫、（大阪）大谷久夫、（九州）大園久松、藤沢正雄、前田力敏、このほか各戦隊から代表者一名を充てた。

昭和42年4月20日、①会報第一号を発行し、建設予定日を42年秋まで延期を公表した。42年7月30日②会報第二号を発行、当時における募金額は四六万三千五百円の旨伝えた。

42年8月13日、船舶特幹隊を偲ぶ集いが香川県小豆島で開かれ合同慰霊祭が挙行された。この機会に幸ノ浦慰霊碑建設を支援することが特幹隊関係者の間で確認され、併せて特幹隊訓練緑りの地小豆島に、慰霊碑（のちの若潮の塔）を建設する件も方針を定めた。

昭和42年12月3日、関係者三五〇名

参列のもと、除幕式を行ない慰霊祭を実施した。翌12月4日、呉市音戸のロッヂにおいて、ご遺族多数のご参列を得て大会を開催、海上挺進戦隊生き残りの戦友会③の会と結成準備中の特幹隊の会若潮会とが、その構成要員が大きく重複することから、二つの会を合体し若潮会と呼称することとした。

若潮会は、斎藤義雄を会長・儀同保を事務局長として発足、特幹各期生会の拡充、小豆島慰霊碑建設の決定、幸の浦慰霊碑の護持継続等を定めた。

その後、44年6月15日、若潮会全国幹事会を京都で開催、小豆島建碑の都合から本部を関西に移し、会長に中岡重成・事務局長に奥田英郎を選んだ。

二、会の構成

若潮会は全国組織で、海上挺進戦隊に関係した者および戦隊には関係しなかったが、船舶特別幹部候補生に関係した者をもって組織している。このうち支部の主なもの、北海道・東北・関東・近畿・広島および九州である。

因みに海上挺進戦隊の編成の中で一般隊員の構成は、第一、第十九戦隊は特幹第一期生、第二、第三十戦隊は特幹第一期生と現役下士官・下士官候補者および乙種幹部候補生で、また本土決戦準備のために編成していた第三

十、第四十戦隊、第五十一、第五十二戦隊は、特幹第二期および第三期生を充てていた。船舶特幹生はそのほか最後の第四期生がいる。

三、主な行事

毎年1月下旬、関東支部が中心となって戦没者遺族を招き新年交礼会を開催。毎年7月13日、靖國神社御霊祭に昇殿参拝（関東支部主体）。毎年11月上旬、戦没者慰霊祭を靖國神社で実施し併せて関東支部の総会を実施。幸ノ浦では、10月初旬、二年ごとに大祭・小祭を、陸軍海上挺進戦隊戦没者慰霊顕彰会（若潮会の内部組織）で執行。



幹候九期（操縦）の会

甲種幹部候補生として、各予備士官

学校（前橋、豊橋第二、久留米、仙台騎兵、機甲、通信、防空、輜重、野砲重砲等）に在校中の九期生が、昭和18年11月、太刀洗、宇都宮、熊谷、仙台等の飛行学校へ航空（操縦）転科した。（七・八期は原隊勤務から転科）

その数は、太刀洗菊池九期のみ二五〇名、太刀洗木脇九期七四名、七・八期七五名、宇都宮黒磯九期のみ一〇〇名、熊谷、仙台の正確な人員は不明。

そして、戦後というよりは、ごく最近になって、それぞれの教育隊ごとに戦友会をもち、それを総称して「幹候九期（操縦）の会」とした。

即ち、菊池会は、昭和59年発足現在の会員は九期一〇三名、教官助教ご遺族併せて一五〇名。

木協会は、平成元年発足、七・八・九期併せて七二名。多数のご遺族をも擁している。

黒磯会は、戦後間もなくの発足とい、現在会員は五〇名。

熊谷、仙台の幹候については、個人的には連絡はあるが、会という組織はない模様。

いづれにせよ、将来は幹候会として

統合的な組織をめざしてはいるが、今しばらくは、幹候九期、操縦）の会を中心にするしか仕方がない表情である。

幹候と特操

幹候の歴史は古いが、航空（操縦）転科は、七、八、九期を通じ一回限りで終わっている。

幹候は特操と混同されやすい。教育飛行隊、錬成飛行隊を通じ特操一期と同じ過程であったせいか、教官、助教であった方々でさえ、今でも混同している。

幹候といい特操といい共に学徒出身であるが、特操一期は幹候九期の入営より遅れること一年後の昭和18年10月の入校である。

実はその特操一期の中に、予備士官学校在校中の幹候九期が転科している。前橋予備士官学校の場合、九期生三五名が特操一期として、熊谷飛行学校へ転属している。（幹候九期の身分のまま、太刀洗飛行学校に転科した者は七五名。）

更に、原隊勤務中の九期の乙種幹部候補生も、相当数特操一期として、転属しているから、或いは混乱の一因はその辺にもあらう。

ただ、残念なことに幹候が、特操と誤まられた例は多いが、その逆の特操

が、幹候に誤まられた例は皆無にちか

い。そのよい例は、従来の特別攻撃隊の出身期別の標示違いであり、今回、特攻隊慰霊顕彰会の刊行した「特別攻撃隊」では、その異同の大半を訂正したが、なお期別不明2名を残している。

幹候と特攻

前記「特別攻撃隊」により集計すると、幹候出身の特攻戦死は、七期一四名、八期一七名、九期六二名、期別不明三名合計九六名である。

転科実数の把握ができていないので正確な率は算出できないが、転科者の15%以上であることは推測にかたくない。（特操22%、少飛33%陸士10%という説もある。）

各会の主な行事

幹候九期（操縦）の各会の行事は次の通りである。

菊池会、年一回各地をもちまわり平成2年10月、宇奈月で開催。本年は七回目。

総会前に、神式又は仏式で慰霊祭を執行。平成元年は、同期生小林栄二（取手市八坂神社宮司）が神主となり東京讃岐会館神殿にて挙行。

昭和62年10月「続航跡」B5判三三〇頁を刊行。

熊本市郊外
元菊池教育隊門前左の門柱は昔のまま



菊池会慰霊祭
神主は同期生 小林栄二
拝礼するは 林 義則遺族 小栗楓子

木協会

年一回靖國神社に於て慰靈祭執行。

平成元年は宮崎県木脇飛行場跡に慰

霊碑建立による慰靈祭を執行。

又、平成元年4月「木協会」発会特集

号『行雲』— B5判六五頁を発刊、

平成2年6月『行雲』 B5判二二二

頁を刊行。

黒磯会

毎年、各地もちまわりで総会を開

催。

幹候会統合への道

平成三年度、市ヶ谷航空碑前祭の

担当が「幹候」と決定した。

これを機会に、期別、科別の枠を撤

廃し、「幹候」一本に纏まらうとする

機運が醸成されつつある。

今まで一本化の組織でないために、

種々不便もあったし、個人的に各種会

合に協力されてこられた方、或いは、

会に所属されていない方々の積極的な

参加を期待する。

この一文を草した目的の大半は、広

く「幹候」の方々の名乗り出を待つこ

とにある。

そして、組織的な活動を展開する基

菊池会 岩田 辰夫

ホタルになった兵隊

(航空機乗員養成所出身)

敗色濃い大平洋戦争の末期日本は、

聯合軍の艦船めがけて特攻と云う人類

史上類のない作戦で、爆弾搭載の飛行

機もろとも肉弾となって、一機一艦を

めざし体当りを敢行して多くの隊員が

若い命を散らした。

知覧は当時陸軍最大の特攻基地で

あった。歴史と景観にめぐまれ、薩摩

の小京都と呼ばれる知覧の町並みは清

深で夢がある。

かつて島津藩の外城であった町並み

にはその面影が今なお色濃く残ってい

る。

武家屋敷群は、一四〇年前に造ら

れ、主屋と庭園がよく調和し、石垣の

上には犬まきの大刈込みによって生垣

が続いている。

昭和五十六年には重要伝統的建造物

群保存地区として選定をうけ、麓庭園

として、「名勝」にも指定されてい

る。

麓川にかかる湊橋を渡ると、道路の

両側に二軒にわたって石燈籠が並ぶ、

坂をのぼり切った処が木佐貫原と云う

台地だ。

この台地が飛行場で

あった。

昭和十六年大月洗

陸軍飛行学校知覧分

校所として開校さ

れ、昭和二十年に沖繩に一番近いと云

う処もあって、沖繩特攻作戦の基地と

なった。そして隊員達は内地はもとよ

り朝鮮満洲、中国から飛行機をかつて

知覧に集結し三月末から沖繩戦の終る

六月末期まで、連日二百五十挺爆弾を

抱いて出撃して行った。

一番若い隊員は、十七歳、一番年を

とった隊員は、明治四十五年生れで当

時三十二歳、二歳と三歳の子供を両手

にかかえ、人に渡して出撃している。

昭和三十年九月かつての飛行場の一

角に建立された観音堂には、知覧基地

の外、加世田市の万世、都城、新田

原、熊本、台湾などの陸軍航空

基地から、出撃散華された一、〇二六

柱がまつられている。

昭和四十九年に特攻銅像「とこしえ

に」が建てられ、翌五十年特攻遺品館

が開館された。それも五十七年には改

装され、内部も充実し手狭になって、

昭和六十年から二年の継続工事で特

攻平和会館として生れ変わった。

そして今では一日千三百人の来館者

ふさわしい殿堂であると修学旅行生が

多い。

中に入ると正面に紅蓮の炎にかこま

れ今まさに海中に没しようとする皇戦

闘機のパイロットの遺体を魂と共に昇

天させようと、白らの冠が落ちるのも

かまわず懸命な六人の飛天(天女)の

陶板画が目につく。一時に千人は収容

出来る資料室には当時の戦闘機(飛

燕)が完全な姿で展示されている。東

京の日本航空協会の所有で、この平和

会館が新築される時、その目玉にと、

私が以前戦争展が福岡市で開かれ協力

した折その百貨店の屋上に在った事を

思い出し、直ちに協会と折衝をして各

務原飛行場より運んだ、世界にただ一

機よりないと云はれている貴重な飛行

機である。

館内壁面には、隊員の遺影、その基

地での生活、住民とのふれ合い、出撃

の模様を物語る写真、パネルが張りめ

ぐらされている、小犬とたわむれてい

る五人の少年兵、出撃前夜最後の便り

を書く者、腕ずもうに興ずる少年飛行

兵の、まだ幼さを残す表情には戦争の

むごさを訴えかけている。

私はその館の館長をしていた。就任

して九四年特攻の真実と平和の尊さ、

平和の有難さを語って来た。しかし遺

影を前に説明していると、遺族の消息

をつかめず遺影なき空白の隊員から、目を引く。

早く家族を捜してくれと云われている。前夜特攻小母さんに、今度帰ってくような気がしたり、又一緒に出撃する時はホテルになって帰って来るよと行った周囲の隊員の遺影からは、何を云って出撃したのだが、翌日早くも特している早く捜して掲げてくれなければ攻小母さんの家へホテルが一匹入ってばさびしいではないか。お前がやらな来た。アッ！ 宮川サブちゃんが帰れば誰がやると叫ばれている様な気が来た。とふりかえると、青白い光をがして心が痛んでいた。

来館者も着実に増加する事を見極めて消えていった。六月に知覧にホテルめ、昭和六十三年七月単身赴任に終止が出るのは、その時が始めてで終り、符をうち私の本来の目的である、一、七月にならないと知覧はホテルが出な○二六人全員の遺族捜しと、今だ遺影いわけで、それが宮川三郎の化身であるなき一○三人の空白を埋めるべく巡礼ろうと云はれたわけである。

多くの関係者の協力もあって、その郎の出身は新潟県の小千谷市と云う処後の二年間に空白遺影も余すところ十で雪が非常に深い処である。一年生から八名となった。

ところで南九州を旅した方は、ガイ学校、その学校の級長が宮川三郎でドさんから特攻小母さん鳥浜とめさんあった。副級長の松崎義勝伍長（少年とホテルになった兵隊さんの話を聞いて飛行兵十三期生）が先に少年飛行兵に志願して行ってしまい、俺は級長であ

日本児童文学、日本民話物語に出てりながら負けたと思つた宮川は、その来る。ホテルになった兵隊さんは、宮後通信省航空機乗員養成所（印旛十四川三郎軍曹の事である。六月六日出期）へ入所し、二人が別れてから四年撃散華している。

館内の遺影等は出撃順に掲げてあることになる。しかも特攻隊員としてので彼の遺影、遺書、通知表の資料はある。

出口の近い所に展示されている。満洲最後の夢を結ぶべき知覧の三角兵舎時代に写した冬の飛行服に身をつつんで、二人はいつまでも語りあつていだ目元のやさしい、人なつこい遺影がた。その翌日松崎伍長（第五十振武

隊）は出撃して征つた。

宮川は今度も俺が負けた。俺は何と云う運の悪い奴だと嘆くことになつた。宮川三郎の属した第一〇四振武隊

は、飛行機の整備不良で飛べない宮川だけを残して二カ月も前に全員戦死している。自分だけ残された運の悪さを嘆いたわけだ。今の若い人たちには到底考えられない事だろうが、当時は真剣にそのように思つたものだ。一度ならず二度までもエンジン不調で行く事が出来ず、そしてその時、もう二度と再び帰って来るものと心に期し、六月六日満二十歳の誕生日の翌日に二機で出撃して行つた。曇り空であった天候も段々と悪化し、行く手は密雲でさえぎられ、降り出した雨も激しさを加えていった。もうこれ以上は行けないと僚機の滝村は戻ろう戻ろうと何度も合図をしたが、お前だけ戻れ、俺は絶対に戻らないぞ、と手を振つた。

宮川は四月にも一度出撃したがエンジン不調で帰っている。それがつらくてもっと調子の良い飛行機をくれと整備隊長に泣いて頼む姿を目撃した者も居た。どんな事情があるにせよ生きて帰つた特攻をみる目は冷やかであつた。彼は行く手の雲がどんなに厚くても二度と帰る気持はなかつた。

宮川三郎だけは、そのまま帰つて来た天台宗吉蔵寺の奥まつた高い処に

なかつた。そうしてホテルになった兵隊さんとして永久にその名が残る事になつたのである。

戻つて来た僚機滝本伍長は、終戦復員しその年の秋に小千谷を尋ねた。あの時宮川はお前は戻れ戻れと何度も合図をよこしたと回想していた。その滝本伍長も心の重圧に耐えかねたのか、翌年死んでしまった。

私が宮川三郎の生家を探し訪問したのは昭和五十七年である。その時彼の同級生松崎少尉（特攻戦死後少尉）の生家も尋ねた。

其処は小千谷市の商店街の一角にあった。ご母堂とお兄さんに会う。ご母堂とはこの年の五月娘さんと二人で知覧にてお会いした事があり、訪問を大変よろこんで下さつた。松崎少尉の霊に経を唱えてまいらせて頂く。

一軒おいた隣が宮川少尉の従兄弟で、生家に連絡をして下さつて兄宮川武一氏の娘婿がわざわざ迎えに来られ先導して下さい。

宮川三郎の生家は小千谷市の郊外に在つた。武一さんと婿さんに持参のアルバムを見せながら知覧のお話をしている処へ一番上の姉夫婦が来られ、その説明がつづく。

やがて武一さんの案内でおまいりした天台宗吉蔵寺の奥まつた高い処に

た天台宗吉蔵寺の奥まつた高い処に

家の墓はあった。般若心経、観音経を唱え終ると、武一さんがゆっくりと次の様な話を語り出した。

もう十年以上にもなりますか、一年おきにいつも六月に螢草をつんで墓に詣でる女性が来られる。その人の小鼻の横に黒子があり、俳優の誰かににていると住職が云っていた。

女学生の頃通学の途中、ある中学生から忘れられない程の親切をうけたと、ある日履き物の鼻緒が切れて、しゃがみながら途方にくれていると、通りすがりの中学生が、だまっただままそれを取り寄せ、やにわに腰の手拭いをさき、あざやかな手つきでなおしてくれた、その中学生が特攻隊で戦死した。ホテルになって帰ってくると云い出撃していった。それを聴き知った彼女はいつも螢草を供え、おまいりに来て下さると云う。

宮川三郎は出撃しながら二度も戻ったことが辛くて「螢になって帰ってくるから追ひはらわないでよ」と云いのこして出撃した。目前に密雲があった時、もう引返す事は出来ないと思操縦桿をかたく握りかえしたに違いない。宮川軍曹の日記は「人生二十年数々の思い出が、泉の如く湧き、激流となって流れ去る」で終わっている。軍曹が幼いころ螢狩りをした一本杉川は梅雨空に

激流となっていることだろう

日記の末尾に歌が書かれていた。

朝夕に君をおもひて我は征く

またぞ会ふ日を夢にみつつも

宮川軍曹は黒子の人を思い浮べながら詠ったであろうかはだれも知らない

また町づくりに懸命に取り組み知事より「夢のある街」と云はしめ、国際観光モデル地区に指定を受けた知覧では、螢のとびかう「螢の里」を建設して、螢になった兵隊さんの語り草と共に伝え遺そうとしている。 板津忠正



長谷川正勝画

図書紹介

河内山 讓著

恩愛の絆 断ち難し

—富嶽特攻隊長

西尾常三郎の生涯—

航空特攻の中で陸軍の最先任者だったのが50期西尾常三郎少佐でした。

西尾少佐が浜松を出発するとき、新妻に残した遺書は、

恩愛の絆は、断ち難し／断ち難きは心弱きに非ず／一たびこれを断たば如何／強き絆は、強き反動を生ず／断々乎 断／今や全く、心静かなり
という血涙の悲壮な言葉でした。

この本は、同期にあたる河内山 讓氏が、門外不出の彼の遺書や隊員の遺言集を始め、多くの人々から寄せられた資料を基にして、富嶽隊員の姿を、熱情をこめてまとめた鎮魂の実録である。

〈定価〉一五〇〇円(税共)
〈出版元〉株式会社 光人社

今後の特攻会報の

発行予定と投稿募集

この会報は春の靖国神社慰霊祭秋の世田谷特攻観音の法要の、それぞれ予告を兼ねて2月と8月に発行します。

このような記事の投稿をお待ちしております。

殉義隊

若杉是俊日記抄

水野 帝

編者註 この一文は「偕行」58年11月号に掲載されたものであるが、投稿者の了解を得てここに転載する。

前書 これは一特攻隊員の遺した日記の抄録である。日記、と書いたが表紙には「反省録」と墨書されている(因みに予科士官学校時代のものは「修養録」、いずれも毛筆)日々の自己反省を主に書く日記ということだろう。若杉少尉の場合は、それが実施学校入校後、特攻隊員になつてからも同じ姿勢と調子で書かれてゐる。当然航士卒業後はそれまでのような教官による日記点検はなかつた。自由に奔放に書いてもよかつた筈であるが、彼は最後まで、即ち特攻で比島に渡るぎりぎりまで反省と自戒の文字を書き連ねている。考えてみると、われわれも学校時代の日記には結構殊勝なことを書いた記憶がある。ただ何年も一貫して続けられたかとなると自信がない。さらに若杉少尉が違ふ所は、書いたことと

実行したことがわれわれのように隔たつていなかった点にある。同期生の一部に今でも彼が神格化されてゐる所以もそこにあるのであろう。

しかし、ここに敢えて彼の日記を掲載させてもらうのは、その立派さを紹介せんが為ではない。端的にいえば、彼が特攻隊に選ばれる経緯(その長い問私にとって大きな謎であつた)とその前後の心境が、他に例を見ないほど生々しく書き残されているからである。志願だつたか命令だつたかの問題にヒントを与える事例も淡々と書かれてゐるし(もちろん一つの例にすぎぬ、と言われればそれまでだが)、何よりも当時の青年将校が持った時局へ危機感と、それに対応する身の処し方、決意、一つの典型が見事に示されてゐる。将校全員がそうだったというつもりは素よりないが、しかし胸に手をあてて虚心に顧りみれば大半の者が思い当るはずである。ところで昨今よく特攻論議を耳にするが、その際きまつて何かピントの外れたらだたしさを感ずる。一応もつともらしい議論のようである。然らば事実と議論が多いのである。いまのそれではない、当時

そのままのわれわれの中にたしかにあつたもの、である。彼の日記は、その事実を髣髴させないだろうか。独りよがりの註釈は慎まねばならぬ。行間にひそむ若杉少尉の万斛の涙、南溟の果からわれわれに訴えてゐる悲痛な叫び(祈りというべきか)を、少しでも読み取つていただければと願う次第である。

若杉是俊 大正12年4月20日生
兵庫県洲本中学二年から広幼42期、航士57期。本籍熊本県。戦死後、陸軍大尉、功三級。

昭和十九年三月十四日 火曜日 晴
一五三〇ヨリ外出ノ服装ニテ分科発表、遠戦卜定マル。之ニテ予ノ御奉公ノ道定マレリ。今日ヨリハ此ノ新シキ道ニ只管没入、己が全能力ヲ發揮シ御奉皇ニ励マン。夜、区隊長殿ノ個人指導アリ。

三月二十日 月曜日 曇 大元帥陛下御臨幸ヲ仰ギ奉リ、晴ノ卒業式挙行セラル。朝方雲低キヲ見テ、空中分列ノ可否ヲ論ジ、飽ク迄強行セント張切リアリシモ、〇八〇〇頃ヨリ小雨、次第相当ノ降雨トナリ、雨天ノ様式ニヨリ執行ト決定。

本部前ニ奉迎ス。畏キコトナガラ、御電顔微笑ヲ浮バセ給ヘル如ク拜シ、

感涙ニ咽ブ。先ズ一〇〇ヨリ馬場等出場ノ天覧劍術、昼食ヲ寢室ニテ了へ、一三〇〇ヨリ御前講演。一イチウナツキ給ヒ聞召ス尊キ御姿ヲ拜シ、感激オク能ハズ。

御民吾れ 生ける験あり 天地の栄ゆる時に 逢へらく思へば

皇国大飛躍ノ時、本校ヲ卒業シテ愈々第一線ニ御奉公シ得ル身ノ幸、限り無し。式モ無事終ヘテ一六〇〇ヨリ父兄ト面接。少尉ノ軍服ニテ御迎ヘスレバ、母ハ「ヨクヤツテクレマシタト涙ヲ流サレタリ。父亦一モウ死ンデモヨイト。些方親孝行ニモナリタルカト嬉シキ極ミ。然シ生ラ累次ノ御訓示ニモアル如ク之ヨリガ真ニ実力ノ養成。励マンカナ。

(註) 御前講演の題目は「航空兵の本領に就て」。口演者は川村勝通候補生、若杉候補生は棒で地図上の地点等を指示申し上げる役目であつた。

三月二十二日 水曜日 晴 〇九三〇ヨリ入校(水戸校)申告。三好校長閣下訓示シテ、実力ノ養成ヲ要求セラル。吉岡幹事殿ヨリモ実践射行ヲ強調セラル。中島主任教官(凡夫、50期)殿モ然リ。予ハ本校在校間、修練ノ主眼ヲ第一線小隊長トシテ最上ノ実力、徳操ノ涵養ニオク。体力ニ於テ、氣力ニ於テ、特ニ又操縦伎倆、智識方面ニ

於テ決シテ悔ヲ残サザル如ク、総ユル方面ニ積極的ニ努力ヲ傾注セン。

四月二十日 木曜日 晴 佐久間、

レ。自己ヲ信ズル者程強キ者ハ無シ。

ヨ。六月二十六日 月曜日 曇 偽ル勿

三月二十四日 金曜日 晴 初メテ高練ニ搭乗ス。爽快限りナシ。渺々ト果シ無ク拡ガル太平洋ノ彼方ヨリ敵機

自己コソ最モヨキ戦友ナリ。自己コソ最モヨキ死友ナリ。迷フ勿レ。自己ヲ信ゼヨ。

六月二十九日 水曜日 見栄ヲ飾ラニ演習ヲ妨ゲラルコト大。

ノ来襲スルアラバ、猪突体当リノ決意堅シ。空中指揮官ハ地上指揮官ニ比シ、特ニ伎倆ノ優秀ナルヲ必須トサル

五月十六日 火曜日 晴 暴風ニ思切リ吹カレヨウ。雨ニ打タレ風ニ痛ミツケラレヨウ。ソシテ快晴ノ時ヲ待トウ。

六月三十日 金曜日 晴 師団長閣下、戦局ヲ説カレ涙アリ。体当リアルノミ。実行アルノミ。

ラルルニ足ル実力ヲ養成セザルベカラズ。

五月二十二日 日曜日 晴 福田信哉殉職ノ報到ル。痛恨ノ極ミ。常住死ハ側近ニ在リ。生死思フハ愚。散ル花。咲ク花、咲カヌ蕾。

七月一日 土曜日 晴 少尉任官。任ノ重大ヲ自覚、驚馬ニ鞭打チ只管奮闘ノ決意鞏シ。

四月二日 日曜日 雨 九七戦未修、初飛行。壮快。精悍ニシテ執拗、而モ闘志満々、百機撃墜ノ願、空念仏ニ終ラシメザランコトヲ誓フ。

五月二十五日 木曜日 晴 楠公祭。己ヲ虚シウシテ純一無雜、唯是忠、他念ナシ。名ヲ求メズ、金ヲ求メズ、命ヲ求ムル無シ。大命ノ儘進ムヲ知りテ生死ヲ知ラズ。

七月三日 月曜日 晴 明治維新小説「練兵館」ヲ読了ス。感ズル所多シ。詩ヲ吟ジツツ正義ヲ断行スル長州武士並木三郎痛快。亦旗本三男坊万代三四郎ノ生涯哀レナリ。不正ヲ知りツツ、男ノ意地ト情ノ心ノ中ノ戦ヒ、悲壯。

四月十一日 火曜日 曇 中川閣下來校サル。例ノ口調ニテ「航空ガ物ヲ言ツテ呉レナケレバ地上作戦ハ手モ足

五月二日 日曜日 晴 線太キ人物タレ。予ノ如キ心ノ小ナル、線細キ小人物ハ將校トシテ不可。外形ニ非ズ。心ヲ練ルベシ。

七月五日 水曜日 曇 演習開始前、警戒警報発令。体当リ要員ニテ待機ス。全員ノ士気旺盛。黒野大尉殿ノ僚機ニテ張切りシガ、敵遂ニ現レズ。空シク一日ヲ送ル。

モ出ナイ。確リ頑張ツテヤレ」奮闘心頓ニ湧ク。

六月四日 日曜日 曇 勅諭信仰。勅諭ハ吾人ノ生命ナリ。勅諭ノ中ニ生キ且ツ死セザルベカラズ。

七月十三日 木曜日 星友寮ニ於テ一班宴会。一日水戸ニ遊ビ、車ヲ飛ばシテ帰校。気分爽快。

時間モ不定、器材モ不整備ノ演習程能率上ラザルハ無シ。本日モ遂ニ操縦セズ、無念。

六月十一日 木曜日 曇 夜、平塚、柴山等見習工帰郷土産ノ馳走ニ預ル。純真無垢。

七月十四日 金曜日 晴 本日ノ訓

四月十三日 木曜日 曇後雨 教官殿九七戦受領ノ為出張、演習無シ。一日無為徒然。面白カラズ。勉強モ手ニツカズ。

六月十三日 火曜日 徳川閣下來校サル。時局下見習士官ノ重責ヲ知レ。速ニ第一線指揮官タルノ実力ヲ養成セ

四月二十七日 木曜日 晴 午前、一寸演習アリ。午後ハ篠原教官殿宅ヲ尋ネ、大荒シ。団結。

七月十四日 金曜日 晴 本日ノ訓

四月二十九日 土曜日 曇 決戦下、三度迎フル天長ノ佳節。軍務御多端ニ渡ラセ給フモ玉体愈々御健カニアラセ給フ由洩レ承リ感激ノ至。

五月九日 火曜日 晴 人ニ頼ル勿

近頃將校トシテ話スベカラザル穢キ事ヲヨク耳ニス。口ハヨクヨク慎ムベキモノニコソ。修養ハ先ヅ口ヲ慎ムヨ

練二相当事故発生セリ。因ハ何ゾヤ。

矢張り目二見エザル疲勞アリタルナラシ。昨夜二四〇〇迄「トランプ」ニ熱

中シタル等、不可不可。自愛スベシ。

七月十九日 サイパン島玉碎發表セラル。一三〇〇黙禱ヲ捧ゲ、護国ノ英

靈ト化セラレシ同胞、戦友ヲ偲フ。感無量。畏レ多キ事ナガラ、陛下ノ御宸

襟如何許リカト唯々恐懼スルノミ。小癢ナリ。彼米鬼ヤ。夫レ神州ノ威ヲ知

ラザルカ。君が代は 歳と共に動かかねば

砕けてかへれ 沖っ白波 絶叫シツツ体当リアルノミ。

七月二十四日 月曜日 晴 八重坊冗談ニ予ヲ評シテ「しつこい」ト言

フ。痛ク感スル所アリ。男ヲシカラザル所アルハ自覚シアリ。蛇ニモ似タル

執念深サラキモノアルヲ自覚ス。男ヲシクアレ。西郷トシコソ予ノ心ノ指

標。恬淡、道ヲ励ムベシ。七月二十五日 火曜日 晴 長嶺殉

職セリト。偉才ヲ失フ。寔ニ惜シキ極ミ。射撃大会。矢張り駄目。失意冷然、

得意泰然。七月二十七日 木曜日 晴 形ハ兎モ角、心ガ肝要。

長嶺少尉葬儀執行サル。生き抜カンノミ。生き抜カンノミ。

七月三十日 日曜日 能代ヨリノ帰還部隊到着。全員元氣旺盛ナルモ、長

嶺ノ顔見エズ、噫。七月三十一日 月曜日 本日ノ単機

戦闘ニテ乙学ノ教育、応打切りトカ。張切ラザルベケンヤ。

八月八日 火曜日 曇 奉読式後、師団長閣下ノ訓話、厭戦思想ニ就テ。

反戦気分、上層階級ニ多キ模様。教育ト尊皇思想ノ消長、果シテ如何。

賀陽中将宮殿下御来隊、会食ノ栄ニ浴ス。

八月九日 水曜日 晴 予ハ我が儘カ。人ノ心モ少シハ考フル要アラン。

礼ハ大切。八月十日 稚心ハ不可。サレド純心

ハ失フベカラズ。八月十一日 木曜日 晴 勞ヲ厭フ

勿レ。マメニ働ケ。八月二十六日 金曜日 曇 黎明戦

隊教練実施ノ予定ナリシモ雨ノ為中止。〇八〇〇ヨリ將集ニ於テ菅原軍司

令官閣下ノ訓話アリ。兎ニ角、皇国非常ノ秋、粉骨精勵、敵機撃滅アルノ

ミ。午後、暗雲ノ下。対爆戦闘。戦隊應急出勤、頗ル爽快。大空ニ捧ゲタル

身ノ光榮ヲ痛感ス。期スル所アリ。九月二日 土曜日 晴 夜間飛行ニ

於テ31号機ノ脚ヲ折ル。誘導灯ヘノ乗り方、大難把ナリシニ因ス。精神的欠

陥ナルコトヲ始メテ自覚ス。注意ノ一

点集中不可ト云フハ、ボートセヨト云フニ非ズ。真剣味不足。平素ハ抜ケ

テ居テモ、ヤル時ハ烈火ノ如ク眼ヲ光ラシ、別人ノ如クナルベシ。慙愧ニ堪

ヘズ。九月七日 射撃大会。修正量不足ニ

テ、スコ。無念。一点ニ注意集中不可。

九月十日 日曜日 休務。短気ノ儘、柴田ノ一言ニ逆上シ、「なめ定」

行ヲ思止リ、菊地中尉殿ノ室（航空寮）ニ泊ル。午前アコーデオン、午後

浜辺ヲ散歩、爽快。九州男児ハ癩癩玉ガ特徴ニシテ且ヨカ所。

九月十一日 父ヨリノ便り、実行ヲ強調セラル。心ニコタフ。

九月十二日 火曜日 三好閣下御栄転ノ送別宴会、涙流シテ皇国ヲ憂ヒ、

吾人ノ奮起ヲウナガシ給フ。熱ト意氣ノ人、寔ニ予ノ目標トスル人物、日本

人中ノ日本人ナリ。士ハ己ヲ知ル者ノ為ニ死ス。人生意氣ニ感ジテハ生死何

ゾ論ゼン。夫レ勇躍前進アルノミ。実行アルノミ。心ニ鞭打チ勉勵セン。

九月十七日 日曜日 曇 久方振り一戦ニ搭乗。連日ノ雨ニテ速度計キカ

ズ、物凄キ着陸、二度脚折ルカト疑フ許リ。胆ヲ冷ス。

九月二十二日 〇八〇〇水戸飛行場

進発、能代飛行場攻撃。能代市ヲ眼下

ニ見テ滑降零トナリ不時着。今少シ早ク故障発生シアラバ如何。

午後演習終了後宴会、能代組ト意氣ヲ揚ゲ。

九月二十三日 薄曇 早朝能代出發、〇九一〇常陸ヲ攻撃シテ本戦隊教

練ヲ終了。愉快ナリキ。

九月二十六日 佐和ヨリ別レヲ惜シミツツ出發。

九月二十七日 昼 能代着。張切ラシカナ。

九月二十九日 始メテ教官トシテ高練ニ乗ル。謙讓ナレ。争フ勿レ。

十月五日 木曜日 夜都亭ニ遊ブ。時ハ天真爛漫タレ。邪氣ノアルハ厭ナ

モノナリ。十月八日 日曜日 台風圈ニ近ク風

強シ。台風一過、速ニ禍根ヲ芟除シテ、大御心ヲ安ンジ奉ラザルベカラ

ズ。強クナレ。強キ意志ノ持主タレ。十月十日 手ヲ翻セバ雲、手ヲ覆ヘ

バ雨、紛々タル輕薄何ゾ数フルヲ用ヒンヤ。所信貫徹ノミ。

十月二十一日 土曜日 曇 篠原中尉殿水戸ヨリ帰隊セラル。飛行師団長

閣下ヨリ人秘封書アリ、曰ク、決死隊要員ヲ募ルト。夫レ日本人ナル限り、

死モトヨリ問題ニ非ズ。然レドモ数次

ノ本土空襲ニ全機墜ノ報ヲ聞カズ。何故ゾヤ。体当リ無キナリ。一機ニテモ生還センカ、敵ハ増長シテ又必ラス來襲スベシ。戦ノ決ハ武力ニ非ズシテ魂胆ナリ。敵ヲシテ如何ナル物量ヲ以テスルモ、皇軍ハ屈セズ、從ツテ神州皇土ハ侵シ難シ。否、絶対永久ニ侵犯シ得ズ」ト思悟セシムルコトコソ、戦勝最大ノ鍵タリ。其ノ法ハ如何。他ナシ。今方ニ敵ハ全力ヲ賭シテ神州ニ迫リ、一挙ニ勝敗ヲ決セント焦慮シアリ。其ノ進攻ヤ寔ニ侮リ難シ。台湾沖航空戦ニ、或ハフイリッピン上陸ニ、其ノ大半ヲ撃破シタリト雖モ、未ダ其ノ野望ヲ破碎スルニ至ラズ。全機全艦隊ヲ滅センバ未ダシ。予ハ誓フ。敵ニ見エタル第一日ニ編隊長機ニ徹底的攻撃ヲ指向シ、全弾ヲ撃チ尽クシタル後必ズ決スル所アルヲ。師団長閣下ヘノ血判忘ルマジ。名ヲ思フベカラズ。身ヲ思フベカラズ。唯、上御一人ヲ念ジ奉ルノミ。唯皇國ヲ念ズルノミ。皇國ノ天壤無窮ヲ信ジテ断行アルノミ。幼年校以來何ヲ学ビ何ヲ鍛ヘ何ヲ得タルヤ。學術科ハ人ニ負ケズ勉勵シタリ。努力シタリ。唯予ノ恐々トシテ常ニ思フハ、彈丸雨飛ノ間、百機紛戦ノ間、猶ヨク平常心ヲ以テ悠久ノ大義ニ生キ得ルヤ否ヤノ一事。杉本中佐ハ一生涯ヲ通ジテ御勅諭忠節ノ項ナル「義

は山獄よりも重く死は鴻毛よりも軽し」ノ心境ニ透徹センガ為、総ユル修業ヲ積マレタリト。噫、必ズ必ズ熱貫セン。ヤラン戦。天皇陛下 万歳 父上様、母上様、是俊ハヤリマス。(註 以後十一月二日まで記事なし) 十一月二日 午前学生ノ後方射撃教育ヲ終ヘ昼食ニ趣カントスル時、篠原中尉殿ニコニコ走り来リ「若杉、貴様出戦準備ノ為即刻帰隊ダ。御日出度ウト仰言ラル。噫愈々出陣力。男子ノ本懐、感激ノ極。教官拜命ニヨリ出陣ノ機当分失シタラント思ヒアリタルニ。一三三〇津川隊長殿(53期)始メ懐カシキ能代分遣ノ人々と訣別。海野(裕、57期)操縦ノ軍偵ニ塔乗出発ス。九七戦、一戦ニ八郎瀉迄送ラレ感

激ニ堪ヘズ。唯粉骨勉勵ヲ誓フノミ。顧ミレバ能代ノ名残又尽キザルモノアリ。大鰐ニ遊ビタル際ノ純心ナル少女ノ踊リ、織田病院ニ森玉ヲ見舞ヒタル時ノみっちゃん、すまちゃん、寛ちゃん、正也ちゃんトノ無邪氣ナ戯レ、或ハ都亭ニテノ楽シミ、殊ニ「うろこ」ニ於ケル美津ノ心カラノモテナシ。人ノ交リハ心ト心ニコソ。純ナルベシ。邪無ケレバ全ク爽。能代ハ第二ノ故郷。一五三〇懐カシノ水戸飛行場ニ到着、隊長殿ニ申告ニ行クニ、父母思ヒ

ガケズ室ニ在ス。全ク驚キタリ。第一線ニ立ツトテ隊長殿態々呼び下サレタルナリ。夜ハ平磯館ニ泊リ久方振りニ温キ父母ノ愛ヲ受ク。噫、予既ニ思ヒ残スコト無シ。征カン哉。征カン哉。忠則孝。念々是忠則孝。 十一月三日 雨 午前父母ヲ校内ニ案内シ、午後水戸迄御送りス。コレガ今生ノ見オサメカ。母上ノ涙、止マル無シ。父母上ハ申サレタリ「是俊ハ既ニ私ノ子デハ無イ。死ンデモ決シテ悲シミマセン。流ス涙ハ嬉シ涙デスヨ」有難キ哉。不肖ノ子乍ラ全力傾注シテ成ラザルコト無カルベシ。唯己ガ誠ヲ効サンノミ。終始世話シ呉レタル海野ノ有情感激ス。戦友ノ分モ必ズヤル。夜ハ明治ノ佳節ヲ寿ギテ将校団ノ宴会アリ。心ヨリ祝賀且ツ御偉徳ヲ偲ビ奉リ、現下情勢突破ヲ固ク期シタリ。 十一月十一日 星友寮ニ遊ブ。純情ハ人ヲ動かス。肉体ハ心ノ容器ヲ研クニ汲々タル勿レ。須ク心ヲ磨クベシ。 十一月十三日 水戸ヨリ常代サン來隊。懐カシキ姉妹ノ感。 十一月十八日 午前水戸ヨリ慰問団來隊。舞踊、武蔵ノ芝居ヲ觀ル。終リテ昼食ニ赴ク時、篠原中尉殿ニ呼止メラレ、驚キテ尋ヌレバ能代空輸部隊帰還セリト。補佐教官連ヲ始メ、学生ノ懐カシキ面々ニ会フ。第一線ニ征ケト

テ盛大ニ送ラレシ手前、未ダ居残リアルハ慙愧ニ堪エザル所、サレド懐カシサニ恥モ忘レテ談笑。緒方、立派ナ写真ヲ贈ル。嬉シ。夜ハ早速星友寮ニ能代帰還部隊ヲ招待ス。武人ハ、特ニ航空人ハ天真爛漫、物事ニ一点ノ滞リアルベカラズ。人ヲ相手トスルヨリ心乱ルナリ。須ク天ヲ相手トシ、名ヤ外聞ヲ念外ニ、所信奮進ノミ。 十一月十九日 日曜日 晴 家ヨリ小刀入手スリト便リアリ。父上ノ御心尽シ、忝ク有難シ。報恩ノ道、他ナシ。征カン哉。征キテ戦ハン哉。河野雅章サンモ壯烈ナル戦死ヲ遂ゲラレタリト。屍ヲ乗り越エ乗り越エ米鬼英鬼ヲ殲滅シ尽クサンノミ。 十一月二十一日 四式戦地上事故生起、慙愧ノ他ナシ。 十一月二十六日 学生ノ射撃教育、予ノ組全員合格ノ好成绩ニ喜ビテ帰ルヤ、皆予ノ特攻隊編入ヲ伝フ。確美ナル内命ニハ非ザレドモ、概ネ確定ノ模様。先般ノ内命消滅ニ些カ愕然タリシ所ニ今日ノ噂、歡喜ノ至リ。愈々征カン哉。今日迄孜孜修練ノ功ヲ体当リニ凝集シテ大艦ヲ屠ル、又快ナラズヤ。「人生有限名無尽、楠氏誠忠伝万古。」噫、悠遠ナルカナ人生ヤ。予死スト雖モ魂魄何ソゾ死センヤ。永遠ニ護國ノ鬼ト為リ、皇國ヲ守リ奉ラン。日本人

生涯ヲ通ジテ御勅諭忠節ノ項ナル「義

着、隊長殿ニ申告ニ行クニ、父母思ヒ

懐カシキ面々ニ会フ。第一線ニ征ケト

鬼ト為リ、皇國ヲ守リ奉ラン。日本人

ノ有難キハ死シテ尚生クルニアリ。純忠ノ大義ニ生クル時、肉体ハ亡ブト雖モ尚死セザルナリ。否、生死以上ニ燦然タル生ヲ稟クルナリ。何ゾ名ヲ求ムルニ非ズ。死後讀ヘラルルヲ希フニ非ズ。唯予ノ死ハ予ノ輝カシキ生ナルヲ信ジ、此ノ生ヲ得ル機ノ近附キタルヲ心ヨリ喜ブノミ。噫、噫、男子ノ本懐ナラズシテ何ゾヤ (以後鉛筆書き)

十一月三十一日 昨日特操モ到着シ、我八紘第十隊ノ編成終了シ、本日出発ノ予定ナリシモ天候ノ為延期ス。夜ハ星友寮ニ遊ビ、浜田、善教、海野等ト盃ヲ交ハス。航運校ノ者トモ逢フ、予ノ壯途ヲ心ヨリ祝福シクレタリ。予程幸福ナル者ハ此ノ世ニ非ザルベシ。星友寮ノ人々ノ御恩又忘ラレザラン哉。

十二月一日 藤屋ニ於テ八紘第十隊宴會ヲ行フ。編成完結及其ノ前途ヲ祝シテナリ。隊長敦賀中尉殿ヲ中心ニ一致團結、任務ニ奮直向前センノミ。噫、義ハ山嶽ヨリモ重ク、死ハ鴻毛ヨリモ軽シ。

夜退庁時、八重坊、清チヤンニ荷物ヲ運ンデ貰ヒ乍ラツクツク語ル。純情程清々シク神々シキ徳操ナシ。予ハ子供ト話スハ大好キナリ。清チヤン「兄サンノ様ダ」ト眼ヲコスレリ。「俺ハ

敵艦目ガケニツコリ笑ツテ体当リスルヨ。ダカラ八重坊モ清チヤンモ笑ツテ俺ノ出発ヲ送ツテクレネ」

「涙ガ出チャツタ」ト二人ハ泣キ笑ヒツツ向フヲ向イテシマフ。八重坊自作ノ詩

若鷺の 誉も高き 特攻隊
召出されて 兄は征くらむ

全ク予ノ如キ未熟者ヲ特攻隊ニ選ビ下サレシ有難サ、コヨナキ名譽ニ唯々感泣、奮闘ヲ誓フノミ。召出サレタ此ノ兄ハ必ズヤル。ヤル。

十二月二日 土曜日 晴 一日特操ノ訓練。彼等一戦搭乗十数時間。氣魄ハ旺盛ナレデモ伎倆未熟、訓練中二機大破ス。然レドモ吾人何ゾ意氣消沈セシヤ。愈々見敵必沈ノ業ヲ練ランカナ。

余暇ヲ求メテ身ノ廻リノ整理ヲ為ス。八重坊、清チヤンノ手伝ヒ忝シ。出発ヲ明日ニ控ヘ、夜ハ自重、充分ノ休養ヲトル。

十二月三日 日曜日 快晴 ウララカナル秋晴レ、吾人ノ壯途ヲ天モ祝ヒ呉レタルカ。諸々ノ人ト最後ノ御別レヲシテ、〇九〇〇將集壯行會ニ臨ム。

參謀總長代理殿、航空總監代理殿ヨリ夫々忝キ御訓示ヲ戴キ、必ズ醜ノ御楯ノ本分ヲ全ウスルヲ御誓シテ式ヲ終

ノ御馳走ヲ頂戴シテ飛行場ニ行ク。星友寮ヨリすいチヤン、妙チヤン、繁

チヤン態々見送りニ末ル。有難シ。師團長閣下ヨリ「万山不重君恩重、一髮不輕我命輕」ト最後ノ御訓示ヲ戴キ、皆ノ打振ル旗ニ送ラレ乍ラ〇〇〇勇躍壯途ニツク。皆様サラバ。長ラク御世話ニナリマシタ。若杉ハ必ズヤリマス。屹度ヤリマス。見テ居テ下サ

イ。 一五四〇新田原着。四機不時着ス。新田原兵站宿舎ニ泊ス。夜、一同宮崎神宮ニ參拜必沈ヲ誓ヒ奉ル。

十二月四日 月曜日 飛行機ノ整備及不時着機ノ追及ヲ待ツ。三機到着。秦機加古川ニテ大破セリト。

十二月五日 火曜日 〇八〇〇欽送裡ニ離陸。沖繩ヲ經テ台湾ニ向フ。航進発起スル二十機ノ苦ガ六機。其ノ儘

出發、一〇二〇沖繩着。新田原上空、空中集合ノ際三竹(少尉)空中接触ノ為墜落殉職。噫惜シイ哉。惜シイ哉。敵艦二目見ユル迄ハ自重自愛スベシ。

天候不良ノ為予定変更、沖繩ニ泊ス。飛大長荒井大尉殿ノ心カラナル響

應ニ感激ス。 十二月六日、七日 追及機待機及ビ飛行機ノ整備ニ過ス。七日情報入ル。

敵モ仲々ヤルワイ。今二目ニ物見セテクレン。

十二月八日 午前、新田原ヨリ日野編隊三竹少尉ノ遺骨ト共ニ到着。遺骨

ト共ニ体当リ。噫、ヤランカナ。 十二月九日 久方振りニ雲高シ。〇一〇〇(註 一三〇〇か)台湾ニ進発セントセルモ隊長機故障ニテ一応全機着陸。予編隊長トナリ、六機ニテ先発ヲ命ゼラル。

颯爽進発セルモ、途中天候不良、海上二〇〇(米)位ニテ前進、宮古、石

垣モ雨ノ為標定シ得ズ、ガムシヤラニ前進、台湾南部晴ノ予報ヲ頼リニ。途中雲下飛行不能トナリ、雲上ニ出テ前進、雲ノ隙間ヨリ陸地発見、大喜ビニ

テ降りタルモ台湾ニ非ズシテ小サナ島、ガツカリシツツ尚搜索スルコト一時間余、雲益々厚クシテ台湾全然標定シ得ズ、一同島ニ不時着決心、此ノ間二機見失フ。遺憾。愈々不時着セント

シテ、本隊ヘノ連絡等ヲ思ヒ、今一度ト飛行中、偶然台東飛行場発見、予ノミ不時着。噫、無力者ナルカナ。慙愧ノ至リナリ。御上ノ赤子ヲ斯クバラバ

ラニシタル罪、万死ニ価ス。余程切腹シテ海中ニ入ラント思ヒタルモ、体当リノ日迄許シ給ヘト我慢シタル辛サ、

コノ償ヒ必ズ為サズンバヤマジ。当飛行場ニアル軍偵隊長森大尉殿(敏夫、54期)ノ御厚情ニテ桜旅館ニ泊ス。不時着機ノコトヲ思ヒ、寝ヤラズ。無念、残念。

(失敗ノ因) 1、無理ヲシタ 2、決心動揺シタ 3、搜索計画的デナカッタ

十二月十日 軍偵隊ト共ニ紅頭嶼不

ダ愉快ナリ。

時着機偵察、三機アリ。林、門倉ハ無

十二月十三日 水曜日 曇 一三〇

事ナルモ、後一名ハ如何、心配ナリ。

〇双練ニテ台東ニ還ル。救護船波浪荒

東ハ恒春ヨリ屏東ニ向ヒ無事ナリト。

キ為帰帆遅レ、明日到着ノ予定。

日野、最後迄編隊組ミアリシニ如何シ

森隊長殿ノ御世話ニテ知本温泉ニ遊

タルナラン。噫、長内如何。慙愧ノ至リ。

プ。お母ちゃんノ情堪シ。

午後屏東ニ連絡トルニ隊長殿既ニ到

昨日来、少シ感冒気味ニテ体ダル

着セラレアリ。不時着人員収容シテ追

シ。病ハ気カラ。

及スルヲ報告シ、不覚ヲ謝ス。遺憾ナ

附記 若杉少尉の日記はここで終

リ。遺憾ナリ。

る。この日記は、屏東から内地に還る

十二月十一日 曇（註ここより再び

整備員に托し御両親宛に郵送されたも

ペン書き）軍偵ト共ニ偵察ス。紅頭嶼

のである。日附は屏東十二月十六日となっ

西方不時着セル林ハ無事ノ如ク、盛ン

ている。

ニ日ノ丸ヲ振りアリ。不時着場ノ方ハ

殉義隊は十二月十八日屏東からク

頭ニ縋帯シアリ。門倉ノ如シ。アト長

ラークに前進、同二十一日一二四〇頃

田カ日野ノ中一人。必ズ不時着シアル

パナイ島西方海面を北上中の米輸送船

等ナルモ未ダ連絡無シ。

団に敦賀隊長以下（若杉少尉を含む）

夜遅ク、島西方ニ日野少尉、林軍

五機が突入した。米海軍作戦日誌によ

曹、不時着場ニ門倉、長田（一名重

る同日の米軍損害は「LST二隻沈

傷、一名軽傷）在ルヲ知ル。之ニテ全

没、駆逐艦一隻損傷」と記されてい

員所在判明セリ、寔ニ嬉シ。サレド遂

る。偶然、殉義隊突入の一時間半前、

ニ又一名重傷者ヲ出セルハ申訳ナキ極

同海面に出撃（ネグロス島から）した

ミニナリ。

私の記憶では、当日スール海一帯は快

十二月十二日 曇 不時着ノ状況モ

晴、敵艦上空には約40機の戦闘機（P

既ニ解リ、且救助船モ出発ト聞キ、一

38、P-47）が哨戒に当たっていた。

四〇〇屏東ニ赴キ隊長殿ニ其ノ旨報告

あの状況下で、よくぞ敵艦船まで肉薄

ス。沖縄ヨリ台湾ニ向フニ宮古、石垣

出来たと思う。突入した特攻機は殉義

ヲ標定セザルハ無謀ナリト御注意ヲ受

隊五機、旭光隊一機、小泉隊一機。そ

ク。慙愧ノ至リ、一言モ無シ。

の日ほかに戦闘機十五機が未帰還と

夜ハ町ノ人々ノ酌ニテ宴ヲ催ス。甚

なつた。



20・12・21クラーク出撃

(同期生) 長谷川正勝画

沖繩第三十二軍

第十一船舶団長 大町茂大佐の

洋上戦死

(悲壮なり 慶良間列島巡視)

石田 四郎

命し地上戦闘を準備することとなった。

(註一)

第三十二軍は、軍指揮下の全陸海軍海上特攻部隊の兵棋演習を3月10日から三日間、県立第一高等

女学校の講堂で実施したが、大町大佐は予て、特攻作戦の作戦準備の指導を

待望しており、この機会を好機と考

え、軍司令官の同意を得て、まづ慶良間

列島所在戦隊から巡視することとした

3月22日大町大佐は所要の随員をつ

れて那覇港を出航した。一行は一五名

で、船舶団関係は副官山口栄中尉、石

田四郎少尉、渋谷悦三郎見習士官を長

とする通信班(若山栄次兵長他五名)

と当番兵一名計十一名・第五海上基地

隊本部は、隊長三池明少佐(46期)、

木村安蔵少尉、南芳明技術少尉、当番

兵一名計四名であった。

乗船の機帆船はエンジンが不調で、

予定より数時間おくれで、22時頃座間

味島に到着した。翌23日、海上挺進第

一戦隊(戦隊長梅沢裕少佐52期)で特

攻艇の秘匿壕の視察等を行ない、戦隊

本部に集合して、一一三〇頃船舶団長

が講評中、突如米機動部隊艦載機の襲

撃をうけた。これは何の警報もなく微

候もない全くの奇襲であった。

この頃、座間味島の海岸では、船舶

工兵第二十六連隊の乳井久男少尉と寺

師清照少尉等が、座間味島防衛強化の

ための海軍砲を大発で輸送して揚陸中

であったが、爆撃にあい艇とともに沈

没した。両少尉は其の後の戦闘で戦死

し、戦死者四三名を出し生存者は僅か

に二六名となった。

大町大佐は、空襲の終った日没後、

巡視を続行するか急遽那覇に帰還すべ

きか、其の判断を通信班を以てする情

報に托し、巡視続行に決した。

大佐は、24日〇四〇〇頃、二隻の割

舟によって阿嘉島に上陸、その後海上

挺進第二戦隊(長野田義彦少佐52期)

の巡視を実施したが、24日以降空襲は

更に激化し、25日には慶良間列島は猛

烈な艦砲射撃を受けるに到った。大佐

は、阿嘉島の山の頂上で、樹木の陰か

ら戦況を視察したが、戦況の容易なら

ざらことを感じた。

第三十二軍では、慶良間列島は地形

の険しい狭い島で航空基地の適地も無

く、米軍が沖繩本島攻略後、二次的に

上陸することは予想したが、沖繩本島

に先だって攻撃するとは考えてな

かった。そこで米軍の輸送船団が、

沖繩本島上陸のため、この附近に集結

する時こそ、特攻艇の出撃のときであ

る、その時までには、いかなることが

あっても隠忍すべきであると、大佐の

胸中は窺い知るべくもないが、考えた

ものと思われる。

船舶団長の重責を負う大町大佐は、

3月25日二二〇〇頃、特攻艇二隻に搭

乗して一路沖繩本島を目指し出発し

た。艇隊は第二中隊宮下力少尉(幹候

10期)の指揮下、小田、麻生、村上の

三候補生(特幹1期)で、いづれも当

千の勇士であった。その乗艇区分は、

一号艇大町大佐、副官山口中尉、石

田少尉 二号艇三池少佐、木村少

尉、南技術少尉(註二)

暗黒の慶良間海峡を行き、前面に渡

嘉敷島がせまる頃、右舷方向から砲撃

を受けた。二連装の砲塔から発した灼

熱の平行弾道は、艇の頭上を轟音とと

もにかすめ、あるいは海面を跳ねて渡

嘉敷島で炸裂した。前方にも敵艦が行

く手を塞ぎ、艇は間際を縫って渡嘉敷

島の阿波連に接岸した。大町大佐以下

六名は、宮下少尉の案内で峠を越え

て、海上艇進第三戦隊本部のある渡嘉

志久に急いだ。第三戦隊長赤松嘉次大

尉(53期)は、25日二二〇〇頃沖繩本

島への転進のため、特攻艇の泛水を命

じ、暗闇の中で作業を行っていた。

船舶団長は「貴様逃げる気か」と怒

り、戦隊長に泛水中止を命じた。特攻



陸軍大佐大町茂(28期)は、第三十二軍第十一船舶団長鈴木義三少将の後任として、昭和19年11月30日、那覇に着任した。挙措謹厳・寡黙しかも温情豊かな軍人であった。第十教育隊長斎藤義雄(44期)は、「大町さんは、私が昭和11年陸軍運輸部甲種練習員(船舶業務・上陸作戦の教育)の時、ご指導を受けた、御立派な方でした」と回顧されている。

船舶団長大町大佐は、第三十二軍れ以下の第九師団台湾抽出に伴う軍戦力の再編成に応じ、特設第二旅団長を拝

兵一名計四名であった。

乗船の機帆船はエンジンが不調で、

予定より数時間おくれで、22時頃座間

味島に到着した。翌23日、海上挺進第

艇の奇襲は、隱密裡の決行が絶対要件なのに、敵輸送船団の影も見えないとき、一〇〇隻の特攻艇が本島へ向って敵中航行することは、その使用企図を曝露しきわめて重大なことである。

沖繩三十二軍においては、特攻出撃の発動は軍司令官が決定し、軍船舶隊長の命令により、戦隊長が実行することを本則としていた。大町大佐は、赤松戦隊長が独断で泛水を実行したものと考えた訳であった。一方、赤松戦隊長は軍司令部に渡嘉敷島の状況を報告すると共に、今後の処置について問合せたところ、25日夜軍司令部から「敵情判断不明、部隊は状況有利ならざるときは、本島系満附近に転進せよの指示電報があった。」(註二)

大町大佐は、その事情を承知したが、未だ転進の時ではないと考え、自らは一刻も早く本島に帰還すべきを痛感した。そこで大佐は、一群(九隻)をもつて沖繩本島に還送することを命じた。赤松戦隊長は、現実の状況から、一群のみでは困難と判断し、第三中隊全力をもって還送することを命じた。第三中隊長皆本義博少尉(57期)は元氣一杯の青年将校で、「この戦況で転進とは何事ですか、敵に後を向ければ収拾がつかなくなる。よって敵を求めて出撃あるのみ」と主張、還送命

令を断った。ここで戦隊長は、戦隊全力の転進を具申し、大町大佐も容認した。しかし泛水作業は、敵上陸に備えて基地隊兵力を陸戦配備につけていたため作業力が極端に弱化した上、作業の一時中断や艦砲射撃の妨害等で甚しくおくれ、泛水完了は天明近くになってしまった。赤松戦隊長は、天明後の転進行動は不可能と考え、前面の敵艦艇に突入するよう具申ししたが、大町大佐は、沖繩本島に対する米軍の主上陸前に艇を使用することは、企図秘匿に適当ならずとして許可せず、艇の揚陸を命じた。部隊は懸命に努力したが、既に体力も気力も限界に来ており、作業は進捗せず遂に夜明けを迎えた。ここで大町大佐は、揚陸可能な二艇のほかすべて自沈を命じ、隊員は涙をふるって自らの手で愛する艇を沈めた。

慶良間列島の部隊は、無線以外に連絡の方法がなく、かつ無線も軍司令部での輻湊のためか、適時適切に命令指示がなされず、精銳な戦隊も殆んどがその特性を發揮し得ずに終わった。26日は、夜明けとともに空襲が始まり、渡嘉志久では海底の特攻艇群に対しても更に猛攻が加えられた。渡嘉志久には、前海上艇進基地第三大隊長鈴木常良少佐が、新海中尉、竹内軍曹ほか一名を帯同し、船舶団長の巡視に立

会のため来島していたが、自ら統率すべき独立第三大隊への帰還の途も塞がれていた。

26日二二〇〇頃、特攻艇二隻(爆装を外す)に総てを托し、大町大佐は沖繩本島を目指して出航した。一番艇に艇長中島一郎少尉(幹候10期)、上肥技術伍長、大町大佐、鈴木少佐、山口中尉、二番艇に艇長竹島候補生(特幹1期)、田中技術上等兵、三池少佐、新海中尉、木村少尉の乗艇区分であった。大佐は出発に際し、「途中万一遭難することがあっても、両艇は互いに救助することなく、一路那覇に直行すべき」旨を訓示した。

両艇は渡嘉敷島西岸を北上し、儀志布島北方を迂回、前島南方から那覇に向う航路をとった。二番艇は儀志布島東方において艇に亀裂を生じ、浸水のため、27日〇一〇〇頃沈没、三池少佐以下全員泳いで渡嘉敷島に辿りついた。一番艇が前島の南方を東進中であるのを二番艇乗組員が視認していたが、その後は消息を断ち、全員戦死したものと判断された。

(筆者)石田四郎 保定幹候隊第九期、船舶工兵第二十六聯隊、19年10月第十一船舶団本部勤務(東京)谷区幡ヶ谷三一五五―八 03―三七七 七一九〇五〇

(註一) 20年3月海上挺進基地大隊を改編、歩兵大隊に準ずる独立大隊とした。慶良間で編成の第一、第三大隊は、2月18日機帆船で本島へ移動した。

3月21日、大町茂大佐は特設第二旅団長を拝命。

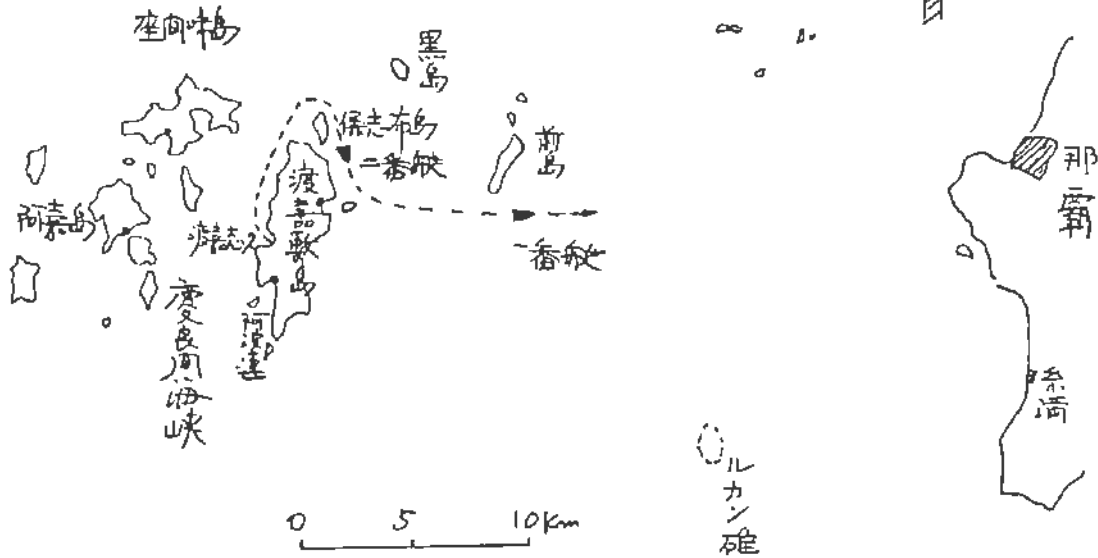
(註二) 第二戦隊第三中隊長中川好延少尉(57期)は、船舶団長の沖繩帰還に対し真摯な意見具申しをした。「特攻基地として発見されないのは当中隊のみである。しかし対岸の慶留間島にマリナーが上陸している気配があり、今一隻でも泛水したら発見は免れない。貴重なたんがの帰還のため十二分の自信はあるが、護送を全うするため全中隊の出撃を許可されたい。所在の敵を撃破して団長を送ります。」

これに対して野田戦隊長は、「敵は威力偵察である。敵の上陸は慶良間列島にはない」と判断したのか、それとも三〇隻が隊伍を組んでは脱出不能と見たか、中隊全員の出撃は許可せず、大町大佐も特攻艇作戦の企図秘匿のため、中隊長の意見をしりぞけ二隻とした。(註三) 3月25日午前、第三十二軍は現地部隊(第三戦隊以外)から、

米軍が慶良間諸島に上陸したとの報(誤報)を受けており25日慶良

間の海上挺進戦隊に転進を命じた。

大町大佐の沖縄本島転進経路図
(昭和20.3.26~27)



少飛会慰霊祭

陸軍少年飛行兵戦没者供養塔遷座式ならびに第二十八回慰霊法要のご案内

昭和9年2月入校の第一期生より第二十期生の全出身者の慰霊碑は、昭和38年、東京陸軍航空学校跡地に建立されました。慰霊祭は当初は碑前において、48年第十一回より靖国神社で、毎年出身者相つどい慰霊の誠を捧げて参りました。

このたび永代にわたる供養を念願して慰霊碑を禅昌寺に遷座、供養塔として建立することになりました。従いまして本年は遷座式と慰霊法要とをつきのように執り行うこととなります。ここにゆかりの方々のご臨席を賜りますようご案内申し上げます。

分

とき 平成2年10月10日午前10時30分

ところ 禅昌寺 武蔵村山市岸二八七

行事 遷座式 境内 一〇・三〇

慰霊法要 一〇・四〇

懇親会 陸上自衛隊 一三・〇〇

立川駅より禅昌寺より自衛隊より立川駅

移動は、貸切りバスで送迎いたします

す

照会先 少飛会事務局 大久保武雄

〒一八二 調布市布田二一三―二

TEL 〇四二四―86―一〇三二

現在の跡地には、記念碑を建立

「東京陸軍少年飛行兵学校跡」

・8月12日に現地で、「抜魂式」を禅昌寺で点眼供養を執り行いました。

第三十八回特攻平和観音年次法要のご案内

大東亜戦争において、若さ青春の身を敢然として祖国に捧げ散華された、陸海軍特別攻撃隊員の英名を胎内に奉藏せる特攻平和観音の年次法要を、浅草寺一山式衆のもと左の通り厳修いたします。

特攻烈士のありし日の面影を偲び、是非皆様お誘い合せの上、お詣りくださいますようご案内申し上げます。(例年出していた案内は出しません)

日時 平成2年9月23日(秋分の日)午後2時

場所 特攻観音堂 世田谷山観音寺内

・渋谷駅南口(環)：②世田谷野沢行

・目黒駅西口(東横線祐天寺経由)：⑤三軒茶屋行

いずれも世田谷観音下車

〒154世田谷区下馬四一九―四

電話(410)八八一―

世田谷山観音寺

住職 太田賢照

〒122千代田区九段南四一三―七

電話(233)〇八五一

特攻平和観音奉賛会(働借社)内

会長 竹田恒徳